昭和集団羞辱史

物売編（夜）

秘写真
花売娘

濠門長恭

巻頭言

「もはや戦後ではない」と経済白書が宣言した昭和三十一年。所得倍増計画が発表された昭和三十五年。時代は高度経済成長に突入していた。

進学率が半数に達していなかった当時、停滞する一次産業地域の新卒者の多くは、急成長を続ける工業と商業へと、就職していった。地方から大都市へ新卒者を運ぶ『集団就職列車』が仕立てられたほどだった。

しかし。華やかで豊かな生活への憧れと希望とを胸に巣立つ若者たちばかりではなかった。意に染まぬものの、さまざまな事情で、都会の汚濁に身を投げ込まざるを得なかった少年少女もいた。

このシリーズでは、高度経済成長の影で泣いた――主として少女たちの足跡を追ってみたいと思う。

なお、本シリーズでは、昭和三十年代に普通に使われていた名称を敢えて使い、現代風には書き換えない。ソープランド（トルコ風呂）が出現するのは昭和六十年になってからであるし、昭和五十年代後半までニューハーフ（オカマ）という言葉は知られていなかった。ビジネスガールは娼売女の意味を持たなかった。

時代劇の中で、経済とか軍事力といった言葉に違和感を覚えるのと同じ理由で、筆者は右の方針を採るものである。

本シリーズの設定は、作者の少年時代の記憶を土台にして、あるいは時間軸をずらし、またはネットで得た知識に基づいて想像や虚構を大幅に交えたものであるが、登場する人物・年齢・団体・地名などはすべてフィクションである。また特定の思想などを賛美もしくは誹謗するものでもない。本文中に述べられる作者の見解についても、論説などではないことをお断わりしておく。

なお、物語の舞台は昭和であるから、作中で言及される「未成年」とは十八歳以上を含む二十歳未満を意味することに留意されたい。

本編について

これまでは昭和三十六年を舞台にしてきたが、今回はそれから四年後に設定した。終戦から四半世紀を経過して、経済の爛熟期に差し掛かろうとしている時代であった。

この時点からさらに四半世紀後には、令和の現在にまで至る停滞が始まるのであるから、ひとつの折り返し点ではあるだろう。

なお筆者は、本編および物売編（昼）で取り上げた四つの職業について、実際に遭遇した体験は無い。ストリッパーや湯女とは違い、物販の様相はまさしく十年一昔で変遷し続けているのである。ルポルタージュ風にまとめちったい。

目次

巻頭言……1
秘写真……4
父を探して……5
父と一緒に……13
父の身勝手……24
父の不始末……55
父は拘置所……80
父との訣別……85
花売娘……92
不安な前途……94
ほころぶ蕾……98
マンコ椿は……114
斬新な衣装……132
縄張の譲渡……137
凌辱と拷問……143
蕾への拷責……163
売春労働者……171
後書き

秘写真

エロ本の自販機もビニ本も無かった当時、この手の写真の入手先は通俗雑誌の通販広告か、いかがわしい場所での（今日でいうならヤクのように）個人販売くらいしかルートが無かった。通販も『美麗カタログ』の送料に当時で千円程度は「切手代用可」で要求される例が多かった。たしかにカタログはそれらしい品を掲載しているが、送られてくるブツについては、街頭での怪しげな販売と大同小異の場合も少なくはなかった。

本編で取り上げる、街頭での個別販売ともなると。酔客を狙って。

「旦那。いい写真がありますぜ。裸と裸で肉弾相打つガップリ四ツの四十八手……」

大枚叩いて買った封筒の中身は……相撲四十八手の写真だったりしたとか。

しかし、詐欺は世につれ世は詐欺につれ。今でも。まっとうに見える通販サイトでもトンデモ商品は多い。ダイオードとキャパシタを組み合わせただけで、電気代が半額になる装置とか、吸気経路に特殊形状のベンチュリーを挿入するとパワーアップするとか。どちらも物理法則に反している（と見抜く素養に欠ける消費者も多い）。

最近で筆者が噴いたのは、『ＴＢは型番です』という外付ＳＳＤですね。１０ＴＢという型番のメモリの容量は３２０ＧＢだそうです。

その点、本編に登場する『秘写真』は正真正銘ですから、実に良心的ではあるのです。

父を探して

「お嬢ちゃん、ちょっといいかな」
背後から声を掛けられて、またナンパかと、大崎和江はうんざりした。しかし、振り返った先に立っているのは制服を着た警官だった。四十歳くらいと二十歳そこそこの二人組。
「きみ、未成年でしょ。学校は、どこ？」
おとなびたワンピースを着て、覚えたばかりの化粧をしていても、「大人の女性」に見られたためしがない。
和江は、古ぼけたハンドバッグから真新しい社員証を出して警官に見せた。
「私、もう社会人です。ヨツボシ電機の女工です」
就職して二か月ちょっと。手取の半分は仕送をしているから、ワンピースを月賦で買ったのが精一杯で、母からお下がりのハンドバッグを買い替えるのは、先になりそうだ。
年配の警官が社員証を見て、苦笑いしながら頭を掻く。
「いや、失礼したね。でも、若い娘さんがこんな時間にこんな場所を独りで歩いていると危ないよ」
「私、父を探しているんです」
どうせハズレだろうと思いながら、定期券ケースに入れた写真を見せる。
「二年半前に出稼ぎに行ったきり、帰って来ないんです。この街で父を見掛けたという人

がいたので、工場が休みの日は探し歩いています」
和江がヨツボシ電機に就職したのは、待遇が良いし郷里からもそんなに遠くないという理由ではあったが、父親とも無関係ではなかった。
若いほうの警官が「おや？」という顔をした。
「こいつは……もしかして、写真売の……」
年配の警官に脇腹を小突かれて、語尾が立ち消えた。
「ご存じなんですか？　やっぱり、ここに居るんですね？」
年配の警官が、今度は難しい顔をして、また頭を掻いた。
「うーん。まあ……ふらふら歩きまわって、お嬢さんが厄介ごとに巻き込まれるよりは、まだしもかな。よし、これからお父さんのところへ案内してあげよう」
年配の警官が先に立って、客引や地回りの挨拶を受け流しながら、和江を案内したのは――場末の、立ち消えそうな赤提灯がしょぼしょぼと並んでいるあたりだった。ひとつずつ路地を覗き込みながら、ゆっくり進んで。不意に懐中電灯を点けて、奥を照らした。
「大崎よ、ちょっと出て来てくれんか」
慌てて飛び出して来たのは、若い男だった。
「俺、関係無いっすから」
警官の脇をすり抜けて一目散。警官は振り返りもしない。
「旦那、何か御用で？」
肉体労働で鍛えた頑丈な身体つきの中年男が背中を丸めて、のそのそと近づく。後ろに控える若い警官の横に佇む娘に気づいて――手に持っていた紙片を、ばささっと取り落と

した。
「和江……」
「あれこれ説明するより、これを見るほうが早いね」
懐中電灯が、散乱した紙片を照らし出す。それは写真だった。
「……？」
和江は写真に目を落とした。白黒で、全体に白っぽい構図だった。数秒。
「きゃっ……！？」
慌てて目をそらした。それはヌード写真だった。全裸の女性が大胆なポーズを取っていた。男性向け雑誌のグラビアなら、当然に花瓶とかの小物で隠されている局部まで、鮮明に写されていた。
「こういう猥褻写真を売ってシノギを立てているんだね。もちろん、君のお父さんの才覚ではない。元締から写真を卸してもらって、割り当てられた場所で酔っ払いを鴨にしている。出稼ぎと言っていたね。何としてでも連れて帰って、畑仕事に精出すように説得しなさい」
警察は民事不介入だからと、二人の警官は父娘を路地に残してパトロールへ戻って行った。
和江の父親――大崎昭大（あきひろ）は、写真を娘から隠すようにして拾い集め、封筒にまとめてからノーネクタイでだらしなく着崩している背広の内ポケットにしまった。
「ここではなんだから、落ち着ける所で話そう」
路地で中年男と若い娘が立ち話をしていれば、場所が場所だけに誤解を招くのはさけら

れない。とっさにそこへ思い到るくらいには、昭大はすれているということだが、和江としては路地の奥が人目につくという父の思考が分からない。ただ、ずいぶんと父はみすぼらしくなったという印象を受けている。

繁華街をすこし戻って。赤提灯の前で止めかけた足をひるがえすと、昭大は薄暗い電球で照らされた小さな看板しか出していない店のドアを開けた。

和江は看板に書かれた店名も目に入らない。もちろん「アベック様歓迎」という小さな文字にも気づかない。ようやく探し当てた父に逃げられては困るとばかりに、腕にしがみついている。実に他人の誤解を招きやすい仕種ではあった。

店の中は薄暗く、気怠いムードの洋楽が低く流れている。高い衝立で仕切られたテーブルには、アベックばかりが三組。テーブルの一方が衝立にくっついているので、必然的にアベックは並んで座っている。

昭大は、どのアベックからも離れたテーブルを選んで、和江を奥へ座らせた。

素早くウェイトレスがやって来る。

「アイスコーヒーを二つ。それと、ショートケーキをひとつ」

ウェイトレスが去って、気まずい沈黙が流れる。数分でウェイトレスが戻って来て、注文の品をテーブルに並べる。ショートケーキは和江の前に。

「何から話して良いものか……父ちゃんは当分の間、この街を離れられない。三十万円の借金が残っている。今の仕事をするという条件で、利息を安くしてもらっている」

三十万円。その金額に、和江は圧倒された。彼女の給料の二年分である。

「そんな……何に使ったの？」

自分のために使ったのではない――と、昭大は口ごもりながら、経緯を打ち明けた。
昭大はヨツボシ電機の孫請である町工場に雇われていた。工場が資金繰りに苦しんだとき、「決して迷惑は掛けない」という常套句で、街金の連帯保証人にされた。もちろん、たんなる保証人と連帯保証人との違いなど知らないままに。あとは、お決まりのコースである。工場は倒産して、街金の取立は昭大におよんで――この街の暴力団である生田組に身柄を引き渡された。こういった場合、女は夜の世界、男は海の世界へ流されるのが相場だったが、出漁の季節を過ぎていたし、昭大はいささかトウが立ち過ぎていた。それで、生田組の下で『秘写真』の売子にさせられたのだった。
シノギは、そう悪くない。月の売り上げは凸凹が大きいが、平均すれば六万円前後で、昭大の取り分はその三分の一だった。
昼間は、これも生田組の手配師に日雇仕事を周旋してもらって、あぶれる日はあっても、月に半分は働いて手取が一万円ほど。
贅沢をしなければ日雇仕事の賃金だけで暮らせるのだから、月に二万円は返済できる計算だが、借金がなかなか減らない――と、昭大は曖昧に言ったが。実際にはまったく減っていないのは、二つの理由があった。ひとつは、高利である。利息は「安くして」もらって、月に五分。これだけで月額一万五千円になる。そして二つ目の理由は――一攫千金を狙って競輪に無駄金を捨てているせいだった。さすがに昭大も、二つ目の理由まで娘に打ち明けたりはしなかったが。
「おまえにも母ちゃんにも迷惑を掛けるが、もうしばらくは見逃してくれ」
もうしばらくって……この二年間で、借金は半分も返せていないじゃないの。

父の話を、和江はそんなふうに受け取っていた。元本が減れば利息も減って返済のペースが早まるという知識は無いので、あと二年以上は掛かると、和江は落胆した。
実際には丸々残っていると知ったら、落胆は絶望まで深まっていただろう。
「私に、何か出来ることはない？」
実家への仕送りをやめて、父の借金の穴埋め……いや、それでは弟が進学できない。跡取息子の洋平はまだしも、下の望夫は良い会社のホワイトカラーにしてやりたい。
「まさか、おまえを泣かせるわけには……」
昭大は口ごもった。若い女なら、三十万円も返済は容易かもしれないが。娘の一生を犠牲にすることになる。とはいえ、このままでは借金は減らない。娘を不幸にせず、娘に助けてもらう。そんな虫のいいことでも考えているのだろう。
「そうだ。ヨツボシは半ドンだったな。土曜の夜だけでいいから、父ちゃんの商売を手伝ってくれないか」
切羽詰まってというよりも、さも名案のように昭大が言う。
「あんなエッチな写真を……」
「心配無い。父ちゃんの目の届く範囲でしかやらせない。身体が汚れるわけじゃないんだし」
言葉の意味が分からないほど、和江も子供ではない。もちろん、身体を汚したことなどないが。しかし父親の物言いには、娘が身体を汚してくれるなら、むしろありがたいといった響きを聞き取ったのだった。
とはいえ、父親の頼みを聞いてあげるより他に妙案もない。勤めてわずかに二か月半。

まだ試用期間だ。三十万円はおろか、三万円でも前借を出来るはずがなかった。
それに父ちゃんの商売を手伝っていれば、所在だけはつかんでいられる。
「いいよ。やってみる」
男ならせいぜい煙草を一服するほどの迷いの後に、和江はそう答えていた。
和江は転落への第一歩を、父親に手を引かれて踏み出したのだった。

気が変わらないうちにとばかりに、昭大は娘を生田組の事務所へ連れて行った。仁義を通しておかないと咎められる。その言い方にも、父親の変貌を垣間見る和江だった。
生田組の事務所、実は総本部は、繁華街からビジネス街へ行く途中にある小さなビルだった。ビル丸ごとが組の所有だから、戦後の新興ヤクザとしては（この地方では）たいしたものだった。
代紋を掲げた玄関を避けて裏口から入って、組員が常駐している広間へ。若い衆が三人ばかり花札に興じている後ろの大きなデスクの端には、女盛りの姐御が腰を据えている。
「おや、大崎じゃねえか」
「えらい若い娘だな。コマしたのか。やるねえ」
からかいの言葉にもいちいち会釈をして、女の前でかしこまる昭大。
「大姐御さんには、今夜もまた一段とご機嫌うるわしく……」
媚びへつらう父親の姿に、いっそうの幻滅を重ねる和江。畑を耕す逞しい姿、たわわな収穫に満足の笑みを浮かべた顔。父は一日も早く田舎へ連れ帰らないといけない。
「こいつは私の娘でして、和江といいます」

姐御の顔が険しくなった。
「まさか、実の娘を売ろうってんじゃないだろうね」
「滅相ですよ。そうじゃなくて、私の売(バイ)を手伝わそうと思いまして」
姐御の顔から険しさは消えたが、不機嫌そうなことに変わりはない。
「そりゃ構わないけどね。写真じゃなくて現物を売れって言われて、あんた、きっちり庇ってやれるのかい？」
「もちろんです」
と、きっぱり請け合ってから、トーンが下がる。
「……揉めたら、組の名前を出して良いですよね？」
「言い方には気をつけるんだよ。ケツは持たないからね」
実際にトラブルが生じても、組員が出張ったりはしないという意味である。売上を強奪されたとかなら、話は違ってくるが。
「分かっておりますです」
そこらのチンピラよりも押しが弱いのは、ヤクザに飼い馴らされた純朴な農民ゆえではあった。
姐御が、表情を緩めて和江に声を掛ける。
「あたしゃ、組の経理を預かってる征子(まさこ)ってもんだけど」
「若頭の前の前の前の女将さんだぜ。若頭より怖い大姐御だ」
「真珠も入れられないへたれチンポが、茶々いれるんじゃないよッ」
若い衆をあっけらかんと叱りつけて。

「親孝行で感心って褒めたげたいところだけど、写真売じゃあ焼石に水だよ。あんたさえ良けりゃ、日に五千は稼げる口を紹介したげるよ。お風呂と違って、年齢制限なんか無いからね」

風呂と年齢制限については何のことか分からなかったが、大筋は和江にも理解できた。怯えて呆れて怒りも湧いたのだが、先に昭大が噛み付いた。

「娘をパンパンにだなんて、とんでもない。いくら大姐御さんだって、怒りますよ」

「そっちこそ、口を慎みな。今の言葉を公園の姉さんたちに聞かれてみな。袋にされちまうよ」

鼻で嗤って。それから、なだめるように言う。

「ちょっと試したのさ。この嬢ちゃん、若頭の眼鏡に適いそうな、そういう雰囲気を持ってるんでね」

「とんでもないです……」

若頭の性癖を噂くらいには聞いている昭大は怖気を振るったが、和江には何のことか分からない。

父と一緒に

翌週の土曜日。和江は夕方の五時に父と駅で待ち合わせて、その足で組事務所へ向かった。横流しを防ぐ意味で、商品は毎日一定数を渡され、売上と売残りは返却する。

事務所の大デスク（の真ん中）には、大姐御ではなく、父よりも十歳くらいは若そうな、スポーツ刈の男が鎮座していた。
「なるほど、若いな。しかし、こんなバケベソ化粧じゃ雰囲気もへったくれもねえな」
昭大の挨拶には素っ気なく頷いただけで、男は和江に目を向ける。
彼が生田組の若頭だと父に紹介されて、和江も深々とお辞儀をした。社会人としては「父がいつもお世話になっておりまして」とかなんとか挨拶をするところだが、大物ヤクザという先入観に威圧されて、言葉が詰まる。
同時に、バケベソと言われたことに憤慨……出来ないでいた。この言葉を和江は知らないが、からかわれたのだとは分かる。いかがわしい商売を手伝うのだから、会社の人に見られても自分だと分からないように厚化粧をして、髪もスカーフで隠している。これが駆け出しの立チンボそっくりだとまでは、実物を見たことのない当人には知りようもないのだが。化粧をしてもかえって不細工になることもあるのだとは、初めて知ったことだった。
「まあ、いいや。売り込みに来るんだったら、スッピンで来いよ」
セーラー服で来れば倍額に査定してやるぜ――と、和江には理解不能な笑いを付け足した。

秘写真の売買は大姐御の征子が仕切っている。彼女からハトロン紙の封筒を五通と、怪しげな黒の封筒を三通と受け取って、昭大は繁華街へ向かった。彼のシマは突き当りの一画と定められている。この界隈だけで秘写真の売子は他にも二人居て、昭大は新参――つまり地の利は良くない。繁華街が最も賑わう土曜日でも、売れて三組。平日は坊主も珍し

くない。それでも一組の値段が千円とか、物によっては三千円もするので、借金の足枷が無ければ、小体（こてい）なアパートを借りて女を食わせるくらいは余裕だった。

捕らぬ狸の皮算用は措いて。

和江は父と別の場所で売るのでも、父と並んで売るのでもない。彼女だけが独りで売って、父はその後見役だった。

まだ昼の名残をとどめて、繁華街を行き来する男たちの足取りもしっかりしているのだが。路地の陰から品定めをしていた昭大が、こちらへぶらぶらと歩いてくる三十歳手前くらいの男を指差した。

「あいつなら脈がある。教えた通りにやるんだぞ」

昭大が路地の奥へ身を隠す。

他の男たちと、どこがどう違うのか、和江には分からなかったが、ともかく父に教わった通りにやってみる。

「ねえ、小父様」

これが昭大なら、相手の年齢と風采によって『課長』、『部長』、『社長』と使い分ける。立チンボあたりなら『お兄さん』か『小父様』だが、ずっと若い和江なら『小父様』一本槍が良い――というのも、昭大の仕込みだ。

下手くそなバケベソ化粧とはいえ、いや、それだからこそ――若さというより稚なさは隠せない。そして声を掛けられた男は、自分より年上の立チンボや呼び込み嬢にうんざりしているはずだった。

果たして男は足を止めて、稚ない少女の話を聞くだけは聞いてみる気になったようだっ

た。
「あの……写真を買っていただけませんか」
男は食いついてきた。
「きみのヌード写真かな？」
からかい半分だろうが。
「いえ……姉の、あの、見本では水着を着ていますけど、買っていただくのはヌードです」
ここで初めて『見本』の写真をハンドバッグから取り出す。和江はただ水着としか言わなかったが――海水浴場でこんな姿を晒せば、監視員が注意するのはもちろん、風紀に厳しいＰＴＡ小母さんあたりが（わざわざ公衆電話を探して）一一〇番しかねない、上乳も下尻も露出した超過激なビキニだった。
「ヌードは……お、お、オマンコまでぱっくり写ってます」
まったく見知らぬ相手、厚化粧とスカーフで変装しているからこそ、ようやく口に出来た言葉だった。
ちなみに。見本の写真と封筒の中身とは、同じモデルを使っている。実に良心的な商品というべきだ。
「そいつも、ちょっと見せてくれよ。ほんとだったら買ってやるよ」
「それは駄目です。お買い上げいただくまで封筒は開けるなって、元締からきつく言われてます」
「なんだ。きみの姉さんじゃないのか」
男は、興味が失せたような口振り。ほんとうにそうなら、とっとと踵を返すところだが、

そうしないのは和江にも興味があるからだろう。
「もしも、中の写真が偽物だったら、どうする？」
「ほんとうに、見本のお姉さんのヌードです。お、オマンコもぱっくりです」
見たくもない写真を見せられて、それは断言できる。
「よし、買ってやるよ。だが、嘘だったら、おまえのマンコで落とし前をつけてもらうぜ？」
「構いません。千円です」
男は苦笑しながら財布を取り出した。封筒を受け取って、その場で開ける。モデルがさまざまなポーズを取っている五枚の写真を表通りの明かりに照らして、不満足そうに頷いた。
「確かに、言う通りの写真だな。まあ、千円の価値はあるか」
この当時、売春のいわゆるショートが千円から二千円であった。それに比べれば、けっして安い値段ではない。それでも、前後不覚の酔っ払いではない、まともな判断力を持った者にも売れるのは、生田組の扱う写真の質がきわめて良質だからである。週刊誌のレベルを超えるヌード写真のモデルになる女は、身体を買ってくれる男がいなくなった玄人と相場が決まっていたこの時代に、生田組だけは飛び切り若い素人女性を調達していたのである。この絡繰については、いずれ詳述する機会もあるだろうから、ここでは話を先に進める。
目の前の『実物』をどうこう出来なかったのが残念――とまでは、男性経験どころか恋愛体験すらろくにない和江には男の心理を読めない。
とにかく――昭大の言い方だと『餌』を呑み込んでくれたので、釣り上げにかかる。

「よろしかったら、シロクロの写真もあります。写真の色じゃなくて、あの……つまり、男と女が……そういう写真です。同じ人がモデルです」
「幾ら？」
今度は心底興味の無さそうな声。
「二千円です。十枚組ですから、お得です」
「いらないね。男のケツなんざ写り込んでちゃ、マス掻く気にもならない。おまえさんが相手してくれるんだったら、ショートで三千円張り込むけど？」
言葉だけでなく腕を伸ばしてきたので、和江は身を翻して路地の奥へ逃げた。男は追って来ない。
「ばーか。誰が小便臭い小娘に聖徳太子を張り込むかってんだよ」
捨て台詞を残して立ち去った。
「良くやった。始め良ければすべて良しだ。この調子で頑張っておくれ」
昭大の声は弾んでいた。それを聞いて、和江も単純に嬉しくなる。
それから三人、立て続けに失敗した。とはいえ、のこのこと路地に誘い込まれて、和江の話だけは聞いてくれるのだから、昭大に言わせれば彼とは大違いなのだった。昭大が声を掛けても、立ち止まるのは十人に三人くらい。そのうちの一人が興味を示すくらいだから――昭大が三十人、四十人に声を掛けたと同じくらいの効果があったわけだ。
もっとも。男が興味を示すのは写真にではなく、和江についてだから、トラブルも少なくなかった。
二人目の男は、和江が売物ではないと知ると、抱きついてきた。尻を撫でられて、和江

は慌てて父に救けを求めた。
「チッ、美人局かよ」
そんな捨て台詞で男は立ち去った。三人目には胸を揉まれて、父親の出番。
五人目は初老の男。土で汚れた作業服で息は酒臭く、すでに足取りも怪しい。見本写真をろくに見ずに、千円の封筒を買ってくれた。中身を一瞥して、すぐ尻ポケットに突っ込んだ。二千円のも売りつけようとしたら、
「どうせなら、あんたのほうが良いな」
するっと和江の背後に回り込んで、抱きついてきた。胸を揉みながらスカートをまくってパンティ越しに股間をまさぐる。
和江が救けを求める前に昭大が姿を現わしたのだが、男は動じない。
「金を払ったんじゃ。わしゃ客だぞ。ちょっとくらいはサービスせえ」
「わしらあ、生田組の傘下で売(バイ)しとるんですがね。事を荒立てずに済ませてはもらえませんか」
「上等じゃ。そっちが生田組なら、こっちは警察じゃぞ。お巡り呼んでやろうか。困るのは、どっちじゃ？」
「……」
昭大が言葉に詰まる。生田組から話(ナシ)をつけて、猥褻写真には目をつむってもらってはいるが、一般市民から通報されては警察としても、まさしく事を荒立てざるを得ない。
「まあ、穏便に済ませたる。もうちょっとだけサービスしろや」
男はさらに三十秒ばかり、乳房を揉み、パンティの上から筋を縦になぞって――それで

千円分の満足はしたらしかった。
「二千円の写真も買ってやるから、ちょっと裸も見せてくれんか？」
和江が全身を強張らせて絶句していると、男は和江を突き放した。
「次に会うときまでに考えといてくれよ。なんなら、三千円で買ってやるよ。それだけのサービスをしてくれるならな」
和江は、乱れた服装のまま、地面にへたり込んだ。
「済まんかった。警察をどうこう言われたら、どうにもならない」
「悪いことをしてるからでしょ！」
和江は叫んだが、その悪いことをしなければ父の借金を返せないのだから……啜り泣くしかなかった。
それでも。前と同じアベック喫茶で三十分ばかり、無言で父と並んで座るうちには気を取り直して、またシマへ戻って商売を再開したのだから、和江もしたたかではあった。したたかのついでに――というわけでもないが。必ずアベックで座っている喫茶店の客たちが、薄暗い中で何をしているかも、ついつい観察してしまった。横並びに抱き合ってキスをしたり、男が女の身体をまさぐったり。けれど、それ以上の行為はご法度らしい。男が女を膝の上に乗せたりすると、店主らしい中年男が現われて、わざとらしくお冷やを注ぎ足したりする。
和江はその日のうちに、客のお触りをいなす術も覚え始めて。二十人ほどに声を掛けて、千円の写真は売り切って、二千円も二つ売れた。九千円の売上は、三千円の手取。
昭大が有卦に入ったときくらいの稼ぎだが。

「初日からこれはたいしたものだ。もうちょいコツを覚えれば、五千円は堅いぞ」
儲かれば儲かるだけ、捕らぬ狸の皮を増やしていく昭大だった。
昭大に懇願されて日曜の夜も出勤して。繁華街の人出は減っても、売上は一万円の大台を超えた。お陰で月曜はあくびの連発で、一度だけだがベルトコンベアーを停滞させて大目玉を食らったりした。
二日続けて門限ぎりぎりの帰寮にも注意をされて。次の土曜日には、帰りを父に寮まで付き添ってもらった。突然の父親の出現に寮監も面食らったが、失業保険証書がいわば通行手形となった。
ので、堂々の門限破り。次の週末の土曜日には、多目に渡されたハトロン封筒十通と黒も六通を売り切った。完売ボーナスを弾んでもらって八千円の手取。昭大は同部屋の三人と寮監さんへショートケーキ（売れ残りの詰合せだが）を奮発する始末。一方の和江は、恐ろしくもなっている。六時間ほどで給料の半月分を超えるなんて、金銭感覚がおかしくなりそうだった。
いや。すでに平凡で幸せな人生の道を、半ばは自身の意志で、踏み外しかけている。身体を触られたくらいで大騒ぎしなくても良いのではないだろうか。身体測定のときは（ブラジャーを着けている子も）パンツ一枚だったし。年に一度の健康診断では、お爺ちゃん先生とはいえ、素手で乳房を揉まれている。
「グミの実も大きくなってきたねえ」なんて言われながら、乳首を摘まれた子だっていた。残念ではなく幸いにも、和江はそこまで発達していなかったけれど。
ちょっと胸を揉まれたりお尻を撫でられたりパンティ（パンツより生地は薄いけれど）

の上からオマンコを触られるくらい、どうってことはない。どころか、それで何千円も売上が増えるのなら、じゅうぶんに見返りがある――そんなふうに考えるようになってきた。

といっても。触られ始めると、なかなかやめてくれずに、結局は父に救けを求めることになる。

そこで思いついたのが、子供の隠れんぼだった。

「あと十数える間にやめてくれないと、大声を出しますよ。ひとーつ、ふたーつ、みいーっつ……」

我慢できる限り、ゆっくりと数えた。これは効き目があった。客はそれなりに満足して、ここのつで引き下がってくれた。パンティの中まで指を入れられると、

「よーっつ、それはやめてください。いつつむっつななつ」

お遊び感覚になって、それ以上の狼藉には及ばない。

一か月もしないうちに、和江も駆け引きを楽しむ気分になっていた。大の男が小娘の言葉に翻弄されるのだから、面白くない訳が無い。

そして、男の本質に気づかされていった。などと大上段に振りかぶる必要はない。要するに、男は例外無く助平だという、ただそれだけのことだった。

商品についての造詣も深まった。売人は三人いると聞かされていたが、三人が三人とも違う商品を渡されている。モデルが違うし、内容も――三種類の組み合わせがあった。

ひとつは、最初に和江が持たされた、変哲のないハトロン紙の封筒に入れられたヌード写真と黒封筒のシロクロ写真。三日に一度の割で持たされるのはハトロン紙の封筒と、そのモデルと年上の女性とが絡み合っている、いわゆるシロシロだった。封筒の色はピンク

で売値は三千円。
　そして三つ目は、単純なヌード写真ではない。ハトロン紙の封筒には大仰に『秘』の赤スタンプが捺されていて、モデルが縛られている。五枚組の二枚か三枚は下着姿で、パンティか腰巻をまとっている。これと対をなす封筒は赤色で、同じモデルが全裸で拷問を受けているシーンとか、縛られて複数の男に犯されていたりする。この頃にようやく使われ始めた言葉で言えばエスエム。売値は二千円と四千円だが、売人が求めない限り征子も押し付けたりはしない。そして、昭大は扱わない。食いつきは良いが、まず買ってもらえないそうだ。
「エロチックなのは助平だが、女を縛ったり叩いたりは変態だ」
　昭大の偏見ではなく、世間常識だった。たいていの男は、「おまえは助平だ」と言われれば苦笑いして頭を掻くだけだろうが、「おまえは変態だ」と言われれば本気で怒る。たとえ理性も羞恥も欠落した酔っ払いでも、そして相手が見ず知らずのチンピラでも、変態とは思われたくないということなのだ。そういう特殊性があるから、旅の恥を掻き捨てられる歓楽温泉地やマニア向けの雑誌に広告を載せる通信販売では需要が高いのだが。
　それはともかくとして。和江にはもうひとつ、気になることがあった。シロシロで絡む年増女はともかく、主役のヌードモデルは四人もいるが、みんな大衆雑誌のヌード・グラビアに登場する娘よりも若い。和江と一つか二つしか違わないのではないだろうか。それは、まあ……それぞれに事情（あまり知りたくはない）があるのだろうけれど。そのうちのひとりが、（年齢を無視すれば）大姐御に似ているように思えるのだった。
　昔と同じようには打ち解けて父と話せなくなっているので、つまらない疑問はうっちゃ

っておいたが、あるいは和江は、自分の運命をこの時点ですでに予感していたのかもしれない。

父の身勝手

梅雨の期間も、アーケードのある繁華街に人の足は途絶えず、露天の路地も建物の陰になって雨の影響は少なかった。梅雨が明けて盛夏ともなると、和江の売上はさらに伸びた。肩も露わなサマーワンピースの御利益である。

ヌード写真に比べれば、エロチックでもなんでもないのに。わずかな腕や膝の露出が、こうも男を惹き付けるとは、男に接すれば接するほどに、男という生き物が分からなくなってくる。

秋物は露出が多いのとシックなのと、週ごとに替えて、違いがあるか試してみようかな。

季節ごとに普段着とお洒落用を買うくらいの金銭的余裕はある。和江が売子として稼いだ金はすべて父親が受け取っているが、その中から週に千円は父から小遣いとしてもらっている。

名目賃金の一万三千円（残業込み）から税金だの保険だのを天引され、寮費と社員食堂の食券購入費、さらに強制の積立貯金。手取は八千円ほど。その半分を仕送しているのだから――月に四千円の臨時収入は、実感としては所得倍増どころではなかった。

その大半は郵便貯金にしているのだし、父の借金も順調に減っているはずだから、季節

ごとに吊るしの服を新調することくらい、そんなに贅沢ではないと、和江は考えるようになっている。

だから、盆休みで帰省したときも、不審に思われない程度にはお土産を張り込んだりもした。ただ、父の消息を家族に伝えられないのが、心苦しかった。

奇麗な身になって故郷へ戻るまでは母ちゃんにも内緒にしておいてくれという、父の懇願だけではない。父が法律すれすれ――ではなく、猥褻図画頒布というれっきとした犯罪に手を染めていることなど、しかも自分まで手を貸しているなんて、口が裂けても言えることではなかった。

居心地の悪い帰省だった。それでも、和江の心は明るかった。父の平日の稼ぎが生活費（と、お酒と煙草）に消えるとしても、畑仕事が始まる来春までには借金を完済出来るはずだった。

ところが。父の借金は減るどころか、逆に増えていたのだった。

確かに、来春には借金を完済出来るだろう――娘におんぶと抱っこで。それだけでも忸怩たるのに、三年以上の音信不通の挙句、尾羽打ち枯らして無一文で逃げ帰る。それでは、あまりに不甲斐無い。せめて出稼ぎ二回分くらいの金は持ち帰りたい。

動機は立派かもしれないが、その手段に競輪を選んだのでは、結果は分かり切っている。

オケラになっても。

荒れた日の最終レースは、ガチガチで決まる。関東勢と関西勢の突っ張り合いだが、どう転んでも番手にノーマークのやつが飛び込んで来る。本命ラインの裏表。あの予想屋はこういうときは必ず外すから、その逆目で鉄板。

溺れる者のまわりには無数の藁が浮かんでいる。トイチ（十日で一割の利息）の街金も網を張っている。一発逆転を目論んで引っ張った一万円が、十五分後には紙屑と化しているという、もはや喜劇が繰り返される。

「済まない。ほんとうに済まない。和江がモデルを引き受けてくれんことには、畑を取り上げられてしまうんだ」

和江が帰省から戻ったその夜に、昭大が寮まで訪ねて来て――近くの公園まで誘い出して。地面に土下座するなり、そう言ったのだ。

「どういうこと？　それより……そんな真似はやめてよ。他人（ひと）に見られちゃう」

事情が分からず、和江は途方に暮れる。父をなだめるようにして、とにかくベンチに並んで腰掛けて。競輪で負けて借金が増えた顛末を聞かされて――和江は絶句するばかり。

そもそも連帯保証人は、求められたら全財産を処分してでも返済に応じなければならない。昭大が持っている財産といえば、農地であり自宅である。

それを残したまま細々と返済していくことで猶予してもらっていたのは、債権者――生田組の温情だった。

ところが利払いすら滞らせたうえに、新たな借金まで重ねて、トイチでは雪だるま式に膨れるばかりだから、これも生田組に代位弁済してもらって――借金総額は三十七万円に達した。

これではいつまで待っても完済など無理だろうと、生田組は伝家の宝刀を抜きに掛かったのだが。実のところ、農地は処分が難しい。宅地に転用するのは法律で禁じられている

から、近隣の農家に買い取ってもらうしかないが、そちらも資力は無いし、増えた田畑を耕す人手が無い。生田組としても、現物を差し押さえたところで処分に困る。
娘に借金を肩代わりさせるか、写真のモデルをやらせろ。そういう話に持って行くための脅しだった。
娘が肩代わりしないのであれば、モデル料として十万円だけを借金と相殺してやるから、今のシノギを続けて細々と返してもらおう。土地を売れとは言わないぜ。
和江に肩代わりさせるとは、毎日五千円でも稼げる仕事をさせる――もっと直截に言えば、身体を売らせるということだ。さすがに、昭大も娘をそんな目には遭わせられない。
「それに……パンティまでは脱がないで良いと言ってくださってる。セミヌードまでだ。色付きの封筒みたいなことも無しだと約束してくれた」
本当だろうか。和江は父の――ではなく、ヤクザの言葉を疑った。しかし、パンティを脱がないでも良いという言葉が、拒絶の一画を崩したのは確かだった。
「だって、四人のモデルさんはみんな……」
シロクロとかエスエムをやらされてるじゃない――とは、父親に向かっては言いにくかった。
「これは口にしてはいけないんだが、あのモデルは、みんな若頭の奥さんだったんだ」
いくらナアナアの警察でも、未成年に猥褻行為をさせたとなると目をつむってばかりもいられない。しかし、結婚した女性は、何歳であろうと二十歳以上の成人として扱われる。民法に限った話だが、顧問弁護士なら、それを根拠に警察と検察を丸め込んでくれる。
だから、若頭は二十歳未満の未成年の娘と結婚しては離婚を繰り返している。とは言え、

愛情が無いわけでもない。大姐御と呼ばれている征子も、姐御と呼ばれている三代目も、もちろん現役の四代目も、頻度の差はあるが、今も（縛って叩いて、とまでは昭大も娘には言わなかったが）抱いている。例外は二代目だけで、これは広域に勢力を張っている組織と四分六の盃を交わす際の献上品にされた。自分の女房を差し出すのは、遠く戦国時代から、服従の証である。

農地を取り上げられては、一家で路頭に迷う。父の懇願を聞き入れるしか、和江に選択肢は無かった。

その週の土曜日。和江が連れて行かれたのは、いつもの組事務所ではなかった。街外れの、倉庫が立ち並んだ一画。いわゆる流通拠点だった。トラックの出入は多いが、何日もシャッターが閉ざされたままの倉庫も珍しくない。それ以上に肝心なのは、この一帯も裏向きでは生田組が仕切っているということだった。たとえ素っ裸の女が縄で縛られて外を引き回されていても、組のバッジを着けた男が付き添っていれば、彼女は透明人間も同じである。

そんな物騒な場所とは、もちろん和江は知らないのだが。

先に述べた、普段は使われていない倉庫。そこには若頭と征子、そして和江の知らない男たち三人が待ち受けていた。

三人の男たちが半袖シャツに替えズボンという平凡な装いに対して、若頭はいつものことながら、ノーネクタイに派手な縦縞の背広。征子は珍しく和服――というか、浴衣姿だった。

「お手柔らかにお願いしますよ」
昭大と和江を運んで来たタクシーは、昭大だけを乗せて走り去った。
狼の群に取り囲まれた子羊。
「まずは、こいつに着替えてもらおう」
手近な木箱の上に、セーラー服一式と下着が置かれた。
セーラー服なら倍額と若頭が言っていたのを、和江は思い出した。ますます不安が募るのを抑えて、和江は勇気を振り絞る。
「あの……ほんとうに、全部は脱がなくてもいいんですよね？」
和江にとっては、半分だけでも気を失いそうな羞恥なのだが。身体測定と同じだと、自分に言い聞かせている。
「ああ。親父にも約束してあるが、パンティは脱がなくていいぜ。本番もさせない。ヌードでも、おまえが厭と言うポーズは強要しない」
なぜ、そんな甘い条件で十万円なのだろうという疑問には、敢えて目をつむる。
「あの……ひとつだけ、お願いがあります。聞いてくださるなら……全部脱いだってかまいません」
若頭は片眉をちょっと吊り上げただけで、次の言葉を待っている。
「競輪場のトイチも、生田組の息が掛かっていますよね。二度と父にお金を貸さないようにしてください」
そこまでは分かっている和代だったが。なぜ生田組が昭大を返済不能に追い込もうとするのか、そこへの洞察は無かった。

和代としては、セミヌードだけで構わないという約束など信じていない。パンティをずらしてみようか。もうちょっとだけ――そんなふうにして結局は『御開帳』まで撮られるかもしれない。どころか、黒封筒のようなことまでされかねないと危惧している。だから、自分から「ひとーつ、ふたーつ」と数えて歯止めを掛けると同様に主導権を握って、自分の犠牲が無駄にならない方途を考えたつもりでいた。

若頭は、二つ返事で和代の申し出を受け入れた。

「なんだったら、親父に渡す日当から利息分は天引してやろうか？」

それでは、娘が父親を管理しているみたいになってしまう。

「私が売った分だけ、全部を天引してください」

日雇仕事と平日の写真売だけで、昭大は（競輪などしなければ）困らないはずだった。

「分かった、そうしてやるよ。さあ、始めるぞ」

男たちは和江を取り囲んだまま、動かない。

「あの……ここで着替えるんですね」

分かり切ってはいたが、どうしても訊いてしまう。着替えているところを見られるのは、全裸を見られるよりも羞ずかしい。若頭が黙って頷くのを見て、和江は改めて覚悟を定めた。

用意された衣装はセーラー服の上下と、清楚なシュミーズと、ブラジャーとパンティ。

和江はサマーワンピースを脱いで、スリップも落とした。ブラジャーは着けていない。下乳に鉛筆を挟んでも落ちないのがブラジャーの着用基準だという俗説を信じている。乳房を形良く整えるという発想は、すくなくとも女学生にはない時代だった。

初めて着けるブラジャーにもたついていると、征子が手伝ってくれた。背中のホックを前で留めて、ぐるりと半回転させてからカップに乳房を押し込むという、当時としても乱暴なやり方だったが――それが正しい装着法だと、和江の頭に刻み込まれた。

シュミーズを頭からかぶって。半年前までは着ていたのだから、セーラー服の上下はすこしくらい作りが違っていても手慣れたものだった。最後に、スカートの中に手を突っ込んでパンティを穿き替えた。

未婚の女性や若妻が穿くのがパンティで、それ以下の未成熟な少女の下穿きがパンツ。中年以上の女性のはズロース。和江は、そんなふうに認識している。その区分けでいえば、形の上ではこれはむしろパンツだった。けれど、肌触りがすべすべしていて、和江が穿いていたパンティよりも生地が薄い。レースの縁取りも付いて、やはりパンティと呼ぶべきだろう。

着替え終わると、木箱に腰掛けさせられた。

「征子、頼むぜ」

征子が化粧セットを隣の木箱の上で開けた。和江は、スッピンで来るように言われていた。あまりにバケベソ化粧なので、それでは商品価値が下がるのだろうと、悔しいが和江は理解している。

征子が施したのは、ごく薄い化粧だけだった。それよりも、髪をいじる。工場では精密器械を組み立てるので、髪の毛が落ちないよう、和江は長い髪を引っ詰めて後ろで丸めている。ちょっと大人っぽい雰囲気になるので、けっこう気に入っているのだが。征子はそれをほどいて、三つ編みのお下げに結い直した。赤いリボンも結んで――まるきり女学生

の印象に変えてしまった。
成熟した女が好まれる風潮に対して、セーラー服と三つ編みお下げ。若頭が狙っている写真の購買層が偏った性癖の持主、ありていに言えば変態であることは――和江には分からない。ただ、コンパクトの鏡に映った自分の顔がひどく稚なくなってしまって、それも羞恥に輪を掛けた。
支度が整った和江の後ろに、中年の男が立った。無言で手首を握って、後ろへ捻じ上げた。
「いやっ……」
反射的に振りほどこうとしたが、びくとも動かない。もう一方の手まで捻じ上げられ、手首を重ねて縄で縛られた。
「約束が違います。ただのヌードだけです」
「プロみたいに色っぽいポーズを取れるってのか？」
「……努力します」
「素人のままごとに付き合ってる暇はねえんだよ。おまえは、誘拐されて甚振られる女学生――そういう設定なら、演技もポーズも要らねえだろうがよ」
「でも……」
「安心しろ。こっちも任侠に生きるヤクザだ。約束は守る。本番はさせねえよ」
「でも……」
「デモもストもねえ。先生、続けておくんなさい」
先生と呼ばれた中年の男が、和江の手首を縛っている縄を引っ張り上げて、首を巻いた。

和江は肩が軋むほどに腕を吊り上げられ、首が絞まるので俯きもできない。
先生が別の縄を二重にして、中間に大きな結び瘤を作った。
「ほら、あーん」
言葉は優しげだが、顎をつかんで締め付ける。痛みに耐えかねて開けた口に縄の結び瘤が突っ込まれて、縄尻が頬を縊った。
「誘拐した獲物には、大声を出されないように猿轡を噛ますのが定石だからな。顔が変形するから、普段の髪形でスッピンのおまえとは別人だ」
ヨツボシ電機の人間にも写真を売ることだってある。ばれないようにしてやったんだと、恩着せがましく言う。
和江は納得するしかない。こんなことを知られたら、会社に居られない。
「それじゃ、撮影開始だ」
和江は壁際へ連れて行かれた。片方には木箱がピラミッドに積まれて、反対側には天井を縦横に走るクレーンの鎖が垂れている。その間に敷かれたブルーシートの上に、和江は横座り。斜め左右からスタンド式ライトで照らされ、大きなレフ板を持った男が、和江に反射光を当てる。
本格的な撮影会に臨んだシンデレラ・ガール。不安と怯えの中にも、浮かれた気分がすこしだけ交じった。
カメラも本格的な一眼レフ。大きなレンズがいろんな角度から和江に向けられて、パシャパシャと立て続けにシャッターが切られた。
何枚撮ろうと、実際に使われるのは五枚組。すこしでも良い構図を求めて、プロはそう

するのだというくらいは、和江も知っている。シンデレラ気分が強くなる。
「次は、いよいよ令嬢が誘拐魔の毒牙に掛かるシーンだ」
セーラー服の胸当が取り去られ、脇のファスナーが開かれて、スカートも太腿までたくし上げられた。
また、一分ばかりシャッター音が響いて。
スカートを脱がされ、上着は鋏で切り裂かれた。
新品なのにもったいないな。そんなつまらないことを考えて、平常心（なんか、とっくに失せているのだが）を保とうとする。
また一分のシャッター音。そして、シュミーズは引き千切られた。
その間に、若頭が服を脱いでいた。六尺褌に背中一面の刺青。しかしよく見ると、それは肌襦袢に描かれた絵だった。
ヤクザのくせに、変なの……
面白がっている場合ではなかった。若頭が和江の後ろから抱きすくめてきた。
「んんんっ……！？」
ブラジャーの中に手を突っ込まれて乳房を握られ、和江は抗議の声を上げようとしたが、猿轡で言葉は封じられている。
「どうした。厭なのか？」
和江は何度も大きく頷いたのだが……
「言ってくれなきゃ、分からねえぜ。厭なのか？」
尋ねるふりをしながら、若頭はねちっこく乳房を揉む。

和江は「厭なのか」という問に答えて、また頷いたのだが。
「そうか、いいんだな」
承諾の意味だと、若頭が曲解する。乳首を摘んで転がしたりもする。
びくんっと、和江の上体が跳ねた。まったく未知の、甘い稲妻とでも形容するしかない感覚が乳首に奔ったのだった。
この時代の少女の常として、和江は自身の身体におそろしく無知だった。股間はおろか、乳房でさえ自分で弄んだ経験も無かった。だから、触発された性感は、まったく未知の領域に属していた。
女房だけで四人も（十代の少女を）コマしてきた男が、そういった事情を見抜けぬはずがない。
「気持ち良いだろ。もっともっと気持ち良くしてやるぜ」
今の和江には、未知の快感は新たな恐怖でしかない。必死にかぶりを振るのだが。
「厭よ厭よも好きのうち、だよな」
若頭はブラジャーをずり上げて乳房を剥き出しにすると、両手で双つの乳房を激しく揉み立てる。
それは圧迫であり苦痛なのだが、乳首を摘まれると、たちまち甘い稲妻が乳房を貫き背筋を駆け抜ける。それを繰り返されるうちに、乳房に食い込んでくる指にさえも、苦痛の中から淡いさざ波を掻き立てられてしまう。
数秒おきにシャッターが切られ、新しいフィルムを詰めたカメラと交換されていくのだが、そんなことは和江の知覚の圏外に去っている。

いつか和江は、胡座を組んだ若頭の脚の間に尻を落として両足を前へ投げ出した形になっていた。
「んん……あぁっ、むんん……」
言葉にならないくぐもった声が、艶を帯びて鼻に抜けている。
つうっと、若頭の右手が下へ滑った。
「あんんっ……みぃぃっ……！」
もどかしそうな呻き声は、すぐに小さな悲鳴に変わった。薄い生地のパンティ越しに、淫裂の中筋を指が滑り上がったのだった。パンティは撮影用に手を加えられていて、股間の裏布が無い。指が滑った跡が、稚ない汁で滲んでいた。
「へえ。一丁前に尖らしてやがるぜ」
淫裂の上端で、布地が鉛筆の先端ほどにも盛り上がっている。
若頭が、そこを指の腹でこすった――というよりも生地を動かして、中の突起と擦れ合うようにした。
「みゃぁぁっっ……やぇぇっ！」
オクターブ高い悲鳴を噴きながら、和江の腰が大きく跳ねる。
「ふふん。生娘なら、これぐらいが合ってるんだろうな」
若頭はパンティの中を侵そうとはせずに布地をこすり続ける。
「あああああああああーっっ……」
和江は歌手顔負けの長い悲鳴を吐き切って、若頭の胸板にぐたっと背中を預けた。初めて受けた弄撫に和江は、峨々と連なる峰の最初の小高い頂に達したのだった。

「ずいぶんと早い仕上がりだったな。縛られて写真を撮られているうちに感じてやがったな。征子よ、おまえの見立ても大したものだな」
今のうちにきわどいやつを撮っておくか――と、膝の間でとろんとしている和江のパンティをずり下げた。
「約束通り脱がしゃしねえが、膝までずらすぜって――やってみたかったが、自分から脱ぐって言い出されちゃあな」
厭と言うことはしないと約束しておきながら猿轡で言葉を封じたり――この男の性癖は度を過ぎて歪んでいるようだ。
早春の萌草のように淡い淫毛は、和江の女性器をほとんど隠していない。それを接写させ、さらに小淫唇をV字形に広げた指で割り開いて、膣口を狭めている処女膜までもレンズの前に曝す。
和江は余韻にたゆたっているだけで意識は失っていないから、何をされているかの知覚はあるだろう。しかし、抵抗のそぶりは示さない。
「さて……山崎のやつ、どうやって消してやろうか」
まるで信頼し切った恋人の胸に抱かれるようにぐったりしている和江の股間をまさぐりながら、物騒な言葉を若頭が独りごつ。
「エンジンが暖まったところで、乗ってみようかい」
和江を床に突き転がした。
「みゃんっ……」
半ばは正気に還って、縛られた裸身を起こす和江。

先生と呼ばれた男が、縄をほどきに掛かったが――いっそう厳しく緊縛するための段取だった。

「んん、んんん……？」

呻いているうちに、きっちり高手小手に縛られ、胸の上下にも縄を掛けられて、もっと牛乳を飲みなさいよと同級生の女子にもからかわれていた乳房が、鞠のように絞り出された。鞠といってもドッジボールとかではなく、ソフトボールといい勝負だが。

足を掴んで胡座を組まされそうになったところで、全身に絡み付いていた快感の残滓が払拭された。

「んんんんっ……あぇぇ！」

脚を閉じようと、渾身の力で抗う。小娘でも、脚の筋力は成人男性の腕力を凌ぐ。先生が手こずっているのを、カメラマンの助手が手伝おうとする。若頭がそれ押し留め、お下げを掴んで仰向かせる。

ばしん！

縄で絞られている頬に痛烈な平手を打ち付けた。

「どうせ、奥の院まで御開帳して、しっかりフィルムに焼き付けてあるんだ。今さらジタバタするんじゃねえ」

現役大物ヤクザの威迫に、和江は震え上がった。それでも。

この人の言うことに従っていたら、また、あんなふうに可愛がってくれるかな――と、そこまで明確に意識してはいないが、なんとなく甘えた気分は残っていた。さらに二発の往復ビンタで、それも吹っ飛んだけれど。

胡座を組まされて足首を引き上げられ、曲げた膝のくぼみに足の甲が嵌まり込む形にされた。結跏趺坐。手を使わないと、自力でほぐすのは難しい。

さらに脛を縛られ、縄尻を首に巻かれて引き絞られた。上体が四十五度にひしがれる。

シャッターの雨が降る中で、若頭が六尺褌をほどいた。

「……！」

成人男性の股間を直視するのは、父と一緒に風呂へ入っていた小学生のとき以来だった。そして父の股間は、当然だがうなだれていた。

勃起した男性器の大きさに、和江は絶望的な恐怖を覚えた。いくら無知でも、女性器の穴に男性器の棒を挿入するのが性行為――子作りだということくらいは知っている。

けれど、それは不可能事にしか思えない。若頭の股間に聳え立つ肉の棒は、擂粉木よりも太くて長い。しかも、ごつごつと節くれ立っている。

「んんんっ、むぅぅぅ……！」

和江は全身を揺すって抗議した。シロクロもエスエムもやらなくて良いという条件だった。すでに縛られていて、これはエスエムだと思うが、縄を解いてもらって半日もすれば、元通りの身体に戻る。けれどシロクロは、処女を破られてしまう。絶対に駄目だ。

「おまえも物覚えが悪いな。厭なことは厭と、はっきり言え。そうじゃないと承諾だと受け取るぞ」

和江を絶望に突き落としておいてから、若頭が言葉を和らげる。

「約束は守るぜ。本番はしねえ」

言葉とは裏腹に、和江の身体を浮かせて前へ倒した。

膝と肩で身体を支えて、尻を高く突き上げた形。まさに牝犬が牡を受け挿れる姿勢と同じだった。
「んんん、んんんんっっ……」
なんとかして虎口を脱しようと、和江はもがく。尻を振って男を誘っているようにしか見えないとは、気づくどころではなかった。
「本番、御上の流儀で言えば、性行為だな。そいつは、ここにマラを突っ込む行為を言う」
若頭の指が淫裂を穿った。
「ゞひいっ……！」
鋭い痛みが奔った。指一本で、こうだ。擂粉木なんか突っ込まれたら、股が裂けてしまう。
「それはしないと、約束しているからな。今日のところは、こっちを使ってやるよ」
若頭の指が後ろへ動いて、肛門をくすぐった。
「ゞゃゞぁぁぁっっ……？！」
息を吸い込みながら叫ぶような、奇妙な悲鳴を、和江は上げた。
指でつつかれたショックもさることながら、若頭が言うようなことは擂粉木をオマンコに突っ込むよりも不可能だとしか思えない。
「ここにチンポを突っ込んでも、本番とは言わねえからな。約束は守ってるぜ」
そんなのは詭弁だ。そうは思っても、抗議の言葉は封じられている。
「ほんとは浣腸して腸を綺麗にするんだけどな。金山寺味噌が付いたほうが、絵になる」
若頭は何やら講釈を垂れながら、指で肛門をほじり始めた。

「力を抜け。力むと痛いぞ」
そんなことを言われても。汚いところ恥ずかしいところを嬲られているという思いに、和江は凝り固まっている。
「しょうがねえな。もちっと暖機運転をしてやるか」
右手で肛門をつつきながら、若頭の左手が横合いから股間をまさぐる。小さな肉芽を探り当てて、きゅるんと摘んだ。
「いぁぁぁぁ……！」
パンティの布地越しに刺激されてさえ凄絶な快感が奔った急所を、今度は直接に摘まれた――だけではない。包皮の中の実核を、枝豆を鞘から押し出す要領で動かされて、和江は腰全体が爆発したような感覚に襲われた。
「そらよ、逝っちまいな」
きゅろんきゅるんと刺激されて、たちまち、先ほど到達したよりも高い頂上へと押し上げられる。つぷっと肛門を穿たれて鈍い痛みを覚えたのだが、それさえも太くて甘い稲妻を呼び寄せる。
「いぁぃ、いぁぁ……」
指を二本にされて、さすがに鈍痛が快感を上回った。
苦痛だけではない。排泄物を出す穴に異物を逆方向から押し込まれて、しかも中を掻き回されるのは、不快とか違和感といった通り一遍の言葉では表わせない奇妙な感覚だった。
「もうちっとほぐしてやりたいが、クソをほじくるのも気持ち良いもんじゃねえからな」
だったら、やめてください――和江は心の中で喚く。

すっと指が抜かれて、痛みが遠のいた。
若頭が身体を起こして、真後ろから迫る気配を感じた――直後。指とは比べ物にならない、太くて熱くて硬い異物が肛門に押し付けられた。
ぐううっと肛門を圧迫される。痛みとは異なる不快感が強まっていって――ぐぼっと何かが突き抜ける感触と同時に、激痛が襲ってきた。
「ぎぁぁぁっっっ……！」
和江は声の限りに喚いた。身体を真っ二つに引き裂かれるような重たい痛み。そして灼熱。
「うううう……やええおお……」
嗚咽がこぼれる。
ばちん！
若頭が尻を思い切り叩いた。
「泣き言を言うんじゃねえ。十万円を稼ごうってんだ。俺を悦ばせてみやがれ。よがり声のひとつも啼いてみろや」
励ますのではなく、さらに泣かせている。和江からは見えないのをさいわいに、指でカメラマンに合図して、泣き顔のクローズアップを撮らせる。
それに気がついて、和江はレンズを睨み返した。それくらいの気力は残っている。
「ついでに、こっちもだ」
若頭がのけぞって、結合部をレンズに曝す。
「まあ、売物にゃならねえが、記念写真ってとこだ」

撮影は九割方終わったが、こちとらはこれからが本チャンだからなと、これはカメラマンに言ったのか。初めてだから乱暴にしてやると言わんばかりに、激しく腰を打ち付け始めた。

ぱんぱんぱんぱん……

がらんとした倉庫の空間に、肉と肉とがぶつかる乾いた音が吸い込まれていく。

和江は、ただ熱痛に翻弄されるだけ。

「んっ、んっ、んっ、んっ……」

肉の杭を打ち込まれるたびに呻き声を漏らしながら、涙をこぼす。

そうして。恥辱と苦痛のうちに、最初の凌辱が終わった。若頭が抜去して立ち上がる。和江は緊縛されて坐禅転がしにされたまま。最後の仕上げにと、汚濁にまみれた肛門がフィルムに収められる。

それまで離れた所から成り行きを見守っていた征子が、親切ごかしに和江に寄り添う。

「もう、これで痛いのは無しだからね――あんたが、いい子にしてればだけど」

和江の汚濁を拭き取ってやりながら、慰めだか脅しだか分からないことを言う。

和江は無表情に聞いているだけ。目は虚ろに死んでいる。

「おまえがあんまりにいじらしいので、ついやり過ぎちったぜ。ボーナスを五万円つけて、父親の借金は二十二万ってことにしてやるよ」

若頭がラッキーストライクを一服しながら、和江に柔らかく声を掛けた。

五十歩百歩じゃなくて、二十二万三十七万。どちらにしても和江にどうこう出来る金額ではないが、それでも、月々の利払いを考えれば大きな違いだ。

征子が和江の頬を縊っている縄をほどいた。
「……ありがとうございます」
感謝の念は無いが、礼を言わせるために猿轡を外したのだと――和江は判断した。ヤクザを怒らせるのは怖かった。あんな痛烈なビンタは願い下げ。もちろん、ほんとうに怒らせたらあれくらいでは済まないだろうと分かっている。
「ところで、物は相談だが……先生、足をほどいてやってください」
若頭の言葉は中断されて、中年男が和江を起こして足の縄をほどき、結跏趺坐もほぐしてやった。
和江は、ぴたりと脚を閉じて正座した。いまさらだが、恥部は隠したい。
「もうちょい頑張るっていうんなら、借金は帳消しにしてやってもいいぜ？」
和江の心が、大きく揺れた。すぐにでも父は郷里へ帰れる。でも、家族の幸せのために、そこまで自分を犠牲にして良いものだろうか。後悔しないだろうか。
「シロクロだと思ってやがるな」
小娘の考えなどお見通しと、若頭が嗤う。
「フェラチオって知ってるか。チンポを口でしゃぶるんだよ。もちろん、ザーメンは良く味わってから飲むんだぜ？」
「……！？」
黒い封筒の写真で、それを見たことはあった。確かな証拠があるから、そういうことをする女性はいるのだけれど。もしも言葉で聞かされていたら、絶対に信じていなかっただろう。排泄器官を口に挿れるだなんて。

男子が鉄管ビールと称して、蛇口を咥えて水を飲むのを見て、ひどく不潔だと思ったものだ。飲水が出るところを咥えるのでも、そうなのに。おしっこの出る部分をしゃぶるだなんて……

「本番じゃねえ。法律でいう『性交』には当たらない。おまえは、綺麗な身体のまんまだ。それでいて、三十七万の借金が帳消。悪い話じゃねえだろ」

そうだ。どんなに不潔で破廉恥なことでも、身体に証拠が残るわけじゃない。口をつぐんで、夫になる人を騙して、幸せに……なれるだろうか。生涯、罪悪感に苛まれるのではないだろうか。

和江の迷いは、次のひと言で叩き壊された。

「ケツマンコにチンポを咥え込んどいて、今さらどうってこたぁねえだろ。おしゃぶり一発二十二万円だぜ。おまえの給料の一年分以上だ」

なぜ、そんな破格の金額をもらえるのか、ちらっと疑問には思ったが。その疑問さえ前提が間違っているとは気づかない。月五分の利息が無ければ、昭大はとっくに借金を返済し終えている。

とはいえ、月五分の複利は年利で八割。この当時の法律で許容されている百九パーセントよりは低いから、そういう条件を呑まされた昭大の責任ではあるが。そういうことを言い出せば、元々の三十万円の債権も、生田組が幾らで街金業者から下取したことやら。

いずれにせよ、三十七万円の借金など、帳面上の数時にすぎない。それを帳消しにしてもらっても、昭大も和江も、一円だって現金はもらえない。ロハでヌード写真を撮影され、肛淫を強いられ、さらに口淫を迫られているという見方だって成り立つ。

「どうなんだよ。たいがいに腹を括れや！」
わずかな疑問も恫喝の前に吹き飛ばされて、和江は自動人形のように頷いていた。
「やるんだな。喋れるようにしてやったんだ。俺のチンポをしゃぶっているところを写真にしてくださいと、はっきり言え。厭なら厭でいいんだぜ。おまえの親父の借金は二十二万円だが……おっと、じきに月が替わって二十三万一千円になるな」
追い詰められて、和江は場末の娼婦でもなければ口にしないような言葉を、その未だ穢されていない唇で紡がされてしまった。
「若頭さんの、お、オチンポを……舐めます。写真を撮ってください」
「舐めるだけじゃねえよ。喉の奥まで咥え込んで、しゃぶって、ケツマンコにされたように、今度はおまえが自分で頭を動かして出し挿れするんだ」
「……」
「復唱しろとは言わねえ。始めてもらおう。縄は縛ったままだぜ。そのほうが絵になるからな」
まだでろんと垂れているが、真珠を入れて節くれ立った亀頭を、和江の口に近づける。
「その前に、お願いがあります！」
和江が勇気を振り絞って訴えた。
「この期に及んでなんだってんだよ」
「キッスしてください」
「はあ……？」
強面のヤクザに似合わず、ポカンと口を開けて少女の顔を見下ろす若頭。

「私、まだキッスをしたこともないんです。それなのに……」
言葉を詰まらせたが、どうにか思いの丈を口にする。
「初キッスがオチンポなんて、厭です。せめて、まともなキッスくらい……」
「こりゃまた……くくく……」
爆笑寸前の微苦笑――とでも形容したら、いくらかでも雰囲気を伝えられるだろうか。
「ますます気に入った。いいだろう、願いは叶えてやるよ――立ちな」
気力のありったけを振り絞って、女のほうからキスをねだるなんてはしたない真似をして、和江はへたり込んでいる。
「世話の焼けるお嬢ちゃんだな」
緊縛されてぴっちり閉じている腋の下に手を差し入れ、釣り上げるようにして、若頭が少女を立たせる。膝に力が入らず崩れ落ちようとするのを強く抱き締めて支えるというか、直立を強制させておいて。顎を上向かせ、覆いかぶさるようにして唇を重ねた。
「んむううう……！？」
キスといえば唇の接触――くらいにしか考えていなかった和江は、いきなり唇の裏を舐められて仰天した。さらに押し入ってこようとするのを、歯を食い縛って拒んだ。
口を開けろ――と、若頭は言葉で説得したりはしない。片手で和江の頭を抱え込んで逃げられなくしておいて、もう一方の手をふたりの間に滑り込ませると、和江の乳首を摘んだ。力まかせにひねる。
「んみいいっ……！」
甘い稲妻ではなく鋭く重たい激痛に襲われて、食い縛っていた力が緩む。すかさず、舌

が口中に押し入ってきた。
これを噛んだら、ただじゃ済まない――和江は、口内を蹂躙されるに任せるしかなかった。
舌を絡められ舌帯をつつかれ、歯の裏側を舐められる。口の中で生温かいナメクジが這いずり回っているような気色の悪さに吐き気を覚えた。
女の子が憧れるファーストキッスがこんなものだったなんて――絶対に何かが間違っているとしか思えなかった。
しかしこれで、男性器を口に挿れる覚悟が定まったのかもしれない。
「満足したか？」
労うように、ぽんぽんと若頭が尻を叩いた。が、中指を曲げて尻の割れ目の奥まで嬲るのを忘れてはいなかった。
あらためて跪かされて。まだうなだれている肉棒を唇に擦り付けられると、和江は迷うことなく、その節くれ立った亀頭に口付けた。そして、しゃくり上げるようにして根本まで咥え込んだ。
動作を描写すれば、そうなるのだが。彼女の緊縛された裸身は薄桃色に染まっていた。稚ない絶頂を教えられたときも、股座の奥までレンズに覗き込まれたときも蒼褪めていた肌が、羞恥に悶えている。
それは、そうだろう。これまでは抗議の言葉すら封じられて、男の手で一方的に嬲られていたのだ。自身に慙じるところは無い。しかし今は、縛られているとはいえ、みずからの意志で破廉恥な真似をしてのけた。後難を恐れなければ、噛み付いて反撃も出来る。し

かし和江は凌辱を消極的にでも受け容れてしまった。
毒を啖わば皿まで――でもあるまいが。和江は一心に奉仕を続けている。若頭に言われた通りに、肉棒をしゃぶっている。女の本能なのか、口中を舌で蹂躙されたときに何らかのヒントを得たのか、裏筋に舌先を這わせさえした。
和江の努力に応えて、淫茎は太さを増し硬くなり、天を衝く勢いとなって上顎に亀頭を押し付ける。
もっと羞ずかしがると思っていた当てが外れた忌々しさか、これならもっと過激でも行けると思ったのか。
「どうも、絵柄が寂しいぜ。征子、おまえもかわいがってやれ。シロクロでもシロシロでもねえ――さしずめフェラシロかな」
若頭の言葉は聞こえていても、今ひとつ意味を分かりかねた和江だったが。目の前で征子が浴衣を脱ぐのを見て、だいたいは察した。今さら拒む気にはなれない。征子に何をされたって、処女は護られる（と、和江は楽観した）。
それにしても。浴衣は元々が素肌に着る物ではあったが。戦後も二十年を経てアメリカナイズされた昨今、パンティはともかく肌着さえ着けない女は珍しい。
しかし和江が驚いたのは、そのことではなかった。征子の股間には飾り毛が無く、まったく別の極彩色で飾られていた。
刺青だった。般若の面のようだが、口元は隠れている。
口を止めて横目で見つめている和江に気づいて、征子が妖しく嗤った。大きく脚を開いて上体をそらす――と、真っ赤な口をクワッと開いた般若の面が出現した。女性器が図柄

の一部に組み込まれているのだった。
「勝造の歴代女房のうちで、紋々を背負ってんのはあたしだけさ。なんせ、中学からの腐れ縁だからね」
何人女房を取り替えようと、ほんとうの女房は自分だとでも言いたいのだろう。
「馬鹿野郎。てめえのは倶利伽羅紋々を背負ってんじゃなくて、倶利伽羅マンマンをへばり着けてんだろうがよ」
「誰がそうさせたのさ」
夫婦漫才になっちまったと若頭が苦笑いして。
「おらあ。口を動かせや」
正座している和江の膝を足でこじ開けて、つま先で股間をえぐる。和江にしてみれば、とばっちりもいいところ。
「それじゃ、あたしが馬追になってやるよ」
征子が和江の背中に乳房を押し付けて、両手で和江の乳首を摘んだ。
「この動きに合わせて首を振るんだよ」
イチニイ、イチニイと掛け声に合わせて乳首を引っ張る。
「こんなふうに舌を絡めな」
乳首を引っ張る動きに捻りを加える。
和江は――痛いか痛くないかと尋ねられれば、躊躇なく痛いと答えるだろう。しか、気持ち良いか良くないかと問われると、実のところ答に戸惑う。それくらいに、征子の手つきは繊細だった。

「もうちっと、股を閉じろや。般若が写っちまう」
「上等さ。日本全国一億人に見てもらいたいね。あんたこそ、そんなシャツは脱いで、本物を見せちゃどうだい」
「冗談じゃねえ。一家の頭がエロ写真の竿役をしてるなんて知られちゃ、親分さんたちに顔向けが出来ねえぜ」
つまり。彼が刺青シャツを着ているのは、本物の刺青を隠すためだった。そうまでして竿役を務めるのも、やはり彼の性癖の故だろうか。
「ほらほら、また動きが止まった。歯がゆいね。おまえにゃあ、こっちのが良いかい？」
征子は和江の閉じた太腿の間に手を突っ込んで、あっさりと肉芽を探り当てた。それを摘んで、前後上下に引っ張り始める。
「びゃんっ……もぼ、んみいいっ！」
征子の指の動きに合わせてさまざまに呻きながら、和江は懸命に舌を動かした。
和江を操るために摘まんでいるのか、励ましなのか懲らしめなのか、それとも褒美なのか――征子にも判然としていないのではないだろうか。
和江は嫌悪も忘れて、征子に操られて怒張を舐め、しゃぶり、啜って、脳震盪を起こしそうなくらいに上体を揺すった。肉芽を嬲られる苦痛と快感にこぼす呻き声が微妙な振動となって、ますます怒張を猛らせる。
いっそう亀頭が膨れたと感じた直後、喉の奥に熱い衝撃があった。同時に、漂白剤のような臭いが鼻腔に漂う。
「うぐ……げふっ！」

とっさに頭を引こうとしたが、がっちり押さえ込まれて、吐き出すことも出来ない。
「こん畜生め。勝ちゃんの仔種汁を二回も取りやがって。ちゃんとゴックンするんだよッ」
股間の突起を思い切りつねられ、上げた悲鳴は怒張に押し戻されて、和江は噎せた。咳を堪えて、どうにか嚥下する。
「よーし。これで撮影終了だ。先生、ありがとうございました。ヤマちゃん、フィルムは頼んだぜ」
カメラマンと助手が機材を片付ける間に、緊縛の先生が和江の縄をほどき、手首の縄痕をマッサージする。
三人がそれぞれに挨拶をして、倉庫から立ち去って。
「もうちょっと待ってな。おまえの親父が迎えに来るからな」
和江は、木箱の上に置いていた自分の服をすぐに着たのだが。若頭は逆に刺青シャツを脱ぎ捨てて、偽物よりはくすんだ感じの彫物を露わにした。図柄は、まったく異なっている。
「おまえの一発は、ちゃんと残してあるぜ」
床に放り出されている縄を取り上げて、征子を縛りに掛かった。
「畜生。あんな小娘を縛っていた縄を使い回すなんて……」
「じゃかましい」
ばちん、ばちん！
若頭は、乳房に往復ビンタを張った。和江の三倍はあろうかという豊満な乳房が、左右に吹っ飛んだ。

「その小娘の涙と汗を肌に擦り込めば、おまえもちったあ若返るだろうぜ」
先生に比べれば、和江の目にも分かるほどもたつきながら、若頭は征子を坐禅転がしに掛けた。縄も左右が不均衡。さすがにヤクザ稼業が忙しく、性癖ばかりにうつつを抜かしている暇は無かったらしい。
それでも、征子にはじゅうぶんに厳しい――のだと、和江は見て取った。息も絶えだえの征子が縄に酔っているのだとは、分かろうはずもなかった。
若頭はたっぷりと時間を掛けて、征子を犯した。合意の上だから、可愛がったと言うべきか。
尻を叩き髪を引っ張り、覆いかぶさって乳房を握り潰す。そのたびに征子は悲鳴を上げるのだが、苦痛と恥辱を訴えるのではなく、悦びのトーンを帯びているのが和江にも聞き取れた。
終わったとき、淫茎は白濁にまみれていたから、女本来の穴を使ったことは、和江にも分かった。彼女はそっぽを向いていたが、ちゃっかりこっそり盗み見している。
羨ましいな――ふっと、そう思ったのだが。何が羨ましいのかは、自分にも分らなかった。二人が相思相愛らしいことだろうか。縛られて悦んでいることだろうか。歪んだ形とはいえ、男女の営みを交わしていることだろうか。
縄をほどかれた征子は、てきぱきと身繕いをして倉庫から出て行った。すぐに、二人の組員と昭大を連れて戻って来る。
「山崎よ、おまえの借金はチャラになったぜ。親孝行な娘を持って、果報者だな」
昭大は困惑の態で娘に目をやって――誰もいない方角へ視線を彷徨わせて佇んでいるの

を見て取ると、さすがに色をなした。
「話が違うじゃないですか！」
「誰に向かって口を聞いてやがる」
物静かな、しかしドスの利いた声で威圧しておいてから、懐柔の口調に落とす。
「約束は破っちゃいねえぜ。シロクロどころか、マンコにゃあ何も突っ込んじゃいねえ」
昭大は、おろおろと娘に尋ねる。
「そうなのか？　何もされちゃいないんだな？」
ヌード写真を撮られるだけで、じゅうぶんに何かされている。どころか、若頭が言ったこと以外は何もかもされている。しかし、彼女の身体に（じきに消える縄跡の他には）痕跡は刻まれていない。黙っていれば、誰にも知られずに済む。父にも、未来の夫にも。
和江は頷くという小さな動作で、生涯最大の嘘をついた。
昭大としては半信半疑ながら、信じたい思いが心のすべてを占めている。
「ところで、物は相談だがな。あとひと月かふた月、バイを続けちゃくれまいか」
「約束が違い……」
和江が抗議しかけて、自分の思い違いに気づいた。若頭が約束したのは借金に関することだけで、父の去就については何も言っていない。
「俺は、配下の者を無一文で放り出すほど薄情じゃねえ。それに、おまえが抜けた穴を埋める人間を都合しなきゃならねえ。どうだ、山崎？」
「願ってもないことです。ひと月なんて言わずに、来年の二月までは、やらせてください」
「……父ちゃん」

和江には父の気持ちが理解できる。ほとんど三年間の音信不通のあげく、一季分の稼ぎも持たずに帰ったところで、家族にも隣近所にも合わす顔が無い。しかも、よその家は、これから出稼ぎに行こうという時期だ。

「よし、話は決まったな」

生田組としては吹けば飛ぶようなちっぽけなシノギの話がまとまっただけ――にしては、ひどく上機嫌に若頭が頷いた。

「もう、父ちゃんを手伝ってくれなくていいぞ。ほんとうに、ありがとうな。これまでのことは忘れて、正業に励んでおくれ」

それが昭大の、父親としての精一杯の言葉だった。

父の不始末

父を（娘の分際で思い上がった言い方だが）野放しにするのは不安だったので、土曜日の夕方の決まった時刻に、寮へ電話を入れてもらう約束をして。和江自身は、二度と盛り場へ足を向けなかった。

しばらくは、約束が守られた。今週は三千円残せたとか、今日は赤提灯を我慢して自分の部屋で焼酎にするとか、和江を安心させる通話だったが。

十月になると、連絡が絶えた。翌週も電話が掛かってこなくて。組事務所へ消息を尋ねに行こうかと悩み始めた。

和江は、父の正確な所在を知らない。いわゆるドヤ街で、一泊幾らの三畳一間暮らし。宿替えをすることも珍しくないし、若い娘が独りで訪れるのは、夜の盛り場をうろつくよりも危ないと、父から聞かされていた。

――迷っているうちに、向こうのほうからやって来た。父ではなくて、生田組の若頭の元妻現情婦の征子だった。極端に短いスカートを穿いて、ガーターが見えている。この夏に大手繊維メーカーが発表した最新ファッションだが、和江の目には露出狂としか映らない。あるいは、亭主の好きな赤烏帽子だろうかと疑う。

「おまえの親父さんね。ちょいとやらかしてくれちゃってね。顔を貸しておくれよ」

「困ります……」

今日は木曜日。日が暮れてから、寮監の知らない人物に誘い出されたとなったら、それだけで後がうるさい。征子の口ぶりでは、なにか厄介事らしい。門限を過ぎたりすると、反省文はともかく、また勤務中に居眠りしかねない。

そんな躊躇は、次のひと言で消し飛ばされた。

「来なけりゃ、父親とは今生の別れになるよ」

「どういうことですか。父に何かあったんですか？」

征子は直接に答えず、話は本人から聞けと、乗って来た車に和江を押し込む。車は黒塗りの3ナンバー車。運転しているのは生田組の若い衆だった。

和江が連れて行かれたのは、八月末の撮影で使った倉庫。小型トラックが乗り入れていた。

待ち受けていた顔ぶれも異なっている。若頭の他には、菜っ葉服を着た若い男が一人だ

け。トラックの運転手だろう。昭大の姿は無かった。
征子が和江を若頭の前へ突き飛ばす。乗用車を運転していた男は、車で待機しているらしい。もっとも、待機というか周辺を見張っている者は何人もいるだろう。
「父は、ここには居ないんですか？」
父を口実におびき出されたのかと、和江は身の危険を感じた。しかし、征子の言葉に嘘はなかった。
「来てるぜ。その中だ」
若頭が、トラックの横のドラム缶を指差した。
「……？」
意味が分からず、それでも近寄ってドラム缶を覗き込んで。
「……父ちゃん！？」
和江は悲鳴を上げた。父はドラム缶の中に入れられていた。服を脱がされ縛られ折り曲げられて。
「俺らの世界じゃ、不始末は指を詰めて詫びるが、こいつは十本でも足りない事をやらかしやがった。そこで、コンクリに詰めてしまおうってな」
ドラム缶の横には、底の浅い大きな箱が置かれて、どろどろのセメントが練られてあった。
「父ちゃんが何したん？　殺さんといてくだっせ」
お国言葉丸出しで訴える和江。
「こいつはな、屑フィルムを盗んで逃げやがった。おまえの写真だ。屑といっても、今は

使わないだけで、違う構図を組み合わせれば売物になる」
　それを他県のヤクザに売ろうとしたのだが、その組は生田組と交流もあったので、昭大は身柄を拘束されてしまったというお粗末。
「おかげで栄和組に大きな借りを作っちまったし、トウシロに舐められたとあっちゃ、組の面子も丸潰れだ」
　倉庫の壁も床も、ぐわらんぐわらんと揺れるような錯覚。和江はドラム缶の縁にしがみついて、かろうじて父に尋ねる。
「父ちゃん……若頭さんの言うたこと、ほんまなん？」
「済まなかった。どうしても、まとまった金を持って帰ってやりたかったんだ」
「馬鹿！　父ちゃんの馬鹿！」
　和江は大声で喚いて、しかしすこしだけ頭が働くようになった。わざわざ自分を連れて来たのは、最期の別れをさせてやろうなんて慈悲心（？）からではないだろう。何か目的がある。それは……
「お願いです。父を助けてください。私、何でもします。シロクロでもエスエムでも、モデルをやります。どんな所へ売られても、文句は言いません」
　和江は若頭に向かって土下座した。若頭が征子に向かって目配せをしたのは、見えていない。こういう状況で相手に取り縋るのではなく、土下座を選択する。その心の在り方が彼の眼鏡に適った。ぶっちゃければ、嗜虐心を満足させたのだった。
「もちろん、おまえには稼いでもらうさ。相手の組には、謝礼をたっぷり出さなきゃならなかったんだからな。だが、銭金で済まない話もある」

弱みにつけ込み、心の奥まで蹂躙していく。
「ヤクザを虚仮にした奴は、玉（ギョク）を取らにゃあケジメがつかねえ。だが、俺はフェミニストってやつでな。おまえが父親と並んで詫びを入れるってんなら、罪一等どころか二等も三等も減じてやるぜ？」
「何でもします！」
その為に連れて来られたんだと――和江は絶望の中に、確かな希望を見い出した。けれど、処女を奪われ、前よりも過激な写真のモデルにされたり売春をさせられたり、それは銭金の償いだから――その他に何があるというのだろう。
「それじゃあ、素っ裸になりな。服なんかずたずたに切り裂いてやりたいところだが、素っ裸で帰すわけにもいかねえしな」
「御願いです。娘に酷いことはしないでください」
「じゃかあしい！」
父親の訴えは、ドラム缶を蹴って封じた。だけでなく。
「バケツ一杯分ほど入れてやれ」
菜っ葉服の男が、セメントをバケツに掬って、昭大の頭からぶっ掛けた。
「うわっぷ……やめてください……」
情けない声に、和江は耳をふさぎたくなる。
「父を救けてください。虐めるなら、好きなだけ私を虐めてください」
和江は作業服のボタンを力まかせに引き千切った。寮から工場まで歩いて通える距離だし、更衣室で着替えるのは時間の無駄だから、寮住まいの女工は、たいてい作業服で通勤

している。
「裸で帰れって言うんでしたら、そうします！」
和江はブラウスのボタンも引き千切った。若頭の関心を自分だけに向けようという思惑だった。捨て身の演出が出来るくらいには、絶望が遠ざかっていた。
しかしそれは、ますます若頭の嗜虐性向に適う行為だった。
「おいおい。もうちっと、乙女の羞じらいってやつを見せろや」
若頭の苦笑に、和江が言い返す。
「羞ずかしい写真をいっぱい撮られたんです。もう、なんだって平気です」
無意識に嗜虐を煽るのも、被虐の才能というべきだろう。
「そこまで言うのなら……」
言い掛けた言葉を、若頭は飲み込んだ。
和江は、さすがにそれ以上はわざと衣服を破ったりはしなかったが、騎虎の勢いとでも形容したくなる仕草でパンティまで一気に脱ぎ去り、ろくに畳みもせず木箱の上に置き捨てた。『素っ裸』と言われたのだから、靴と靴下も脱いだ。
「そこに立っていろ」
若頭が、木箱の上に転がっている荒縄を手にした。緊縛の先生は、肌触りは柔らかいが良く締まる木綿だか麻の縄を使っていたが、荒縄とは有り合わせもいいところのように、和江には思えた。
このあいだみたいな、もたついた下手くそな縛り方をするんだろうなと、和江は若頭を見下したような気分になった。

筆者がしゃしゃり出ることをお許しいただくなら――これは和江の認識不足である。過日の『先生』は、後年ＳＭが世間に認知されるようになると縄師と呼ばれる専門家である。上には上があるとしても、小結か関脇は固い。同じ伝で言えば、若頭は十両クラスか。学生相撲の横綱が十両に歯が立たないのは周知の事実である。

それはともかく。今は緊縛術など不要だった。和江は前で両手を揃えて手首を縛られただけだった。しかし、縛りの技量というよりは縄の材質に依るところは大きいのだが――先生の縄は肌を抱き竦めるように柔かく、しかし厳しく食い込んできたのに比して、手首には荒縄の毛羽が痛く、わずかな緩みで縄が肌に擦れる。

それは若頭の目論見に、むしろ適していたかもしれない。

「羞ずかしいのは平気だって言いやがったな」

天井から垂れているリモコンボックスを操作して、若頭はホイストを和江の真上へ移動させた。手首の縄をフックに引っ掛けて、鎖を巻き上げる。

和江の両手は高々と吊り上げられて、しかし鎖に体重が半分も掛からないところで止められた。

「だが、苦痛はどうかな」

若頭はズボンからベルトを引き抜いた。吊るしの背広なら三着は買えるという、フランスの超高級品。だからというわけではないが、分厚い革に鱗の模様がくっきりと浮かび上がっている。

それをＵ字形に曲げて、和江の腹を逆撫でする。

「……好きなようにしてください」

わずかにくすぐったいが、このごついベルトで叩かれるのだろうという分かり切った予感に、和江は怯えている。
「初心な小娘を泣き喚かせるのも、猿轡で悲鳴を封じるのも、俺としちゃいい加減に飽きていてな」
若頭は和江の閉じ合わせている太腿の間にベルトの先端を差し挿れ、鱗の面を上にして両手で力任せに引き上げた。
「あうっ……痛い！」
若頭が両手を交互に上下させて、股間をこする。ベルトの幅が広いので淫裂には食い込まないのだが、ベルトをひねって縁を滑り込ませてから、こじ開けてしまう。
「ゲームをしようじゃないか」
「……ゲーム？」
「なに、簡単さ。俺は、こいつでおまえをぶっ叩く。そうだな、百叩きにしよう。その間、おまえが一回悲鳴を上げるごとに、バケツ一杯ずつセメントをドラム缶に入れていく。泣いても恨み言を言ってもだ」
呻き声くらいは許してやる。俺が判断したんじゃ不公平だから、判定は征子にさせる。それでどうだと、和江に尋ねる。
和江には否も応もない。拒めば、たちまちドラム缶にセメントが流し込まれる。
「そう恐い顔をするな。バケツに三十杯四十杯は入れねえと、ドラム缶は万杯にならねえよ」
胸まで埋まったまま固まれば、圧迫されて窒息するかな。腰までででも、コンクリを割る

ときにチンポがもげるかもしれねえぞ。
つまり、ただの一回も悲鳴はおろか泣くことすら出来ない。嬲り者にされている。和江は若頭を恨んだ。しかし、憎む気にはなれない。
こうなった原因を作ったのは父なのだ。盗みへの罰が死刑だなんて、一般社会では許されないが、ヤクザには彼らの理屈がある。いや、江戸時代には十両盗んだら首が飛んでいた。
この『ゲーム』は、若頭の変態性癖を満足させるためのものだけど、『恩赦』のチャンスが与えられたことに違いはない。私が、ベルトの鞭打ち百発を耐えれば、それで父は救える。
「いつまでも黙ってちゃ分からねえぜ」
つま先が宙に浮くほど股間を吊り上げられて、ベルトで前後にしごかれた。
「きひいいいっ……やります」
足が床に着いた。
股間の痛みに悶える暇も無く――若頭がベルトを右手に持って、後ろへ一歩下がった。
「それじゃ、ゲームを始めるぜ。まずは小手調べだ。後ろを向け」
お尻なら、まだ耐えられるだろう。ほっとした思いで、和江は足を踏み換えて若頭に尻を向けた。
間髪を入れず、ベルトが空気を切り裂く唸りと、肉体への衝撃。
ぶうん、バッチャアン！
「きゃ、くっ……」

悲鳴を漏らしかけて、かろうじて堪えた。尻ではなく背中を斜めに打たれた。脂肪と筋肉の薄い部位。文字通り、骨に響く痛みだった。
ぶうん、バッチャアン！
「かはッ……」
ぶうん、バッチャアン！
「かはッ……」
風切音が聞こえた瞬間に、息を詰め歯を食い縛って、呻き声すら封じた。思わず吐き出す息が、そのまま悲鳴だった。
ぶうん、バッチャアン！
尻を水平に薙ぎ払われて、和江は安堵の息を吐いた。『ゲーム』を始める前の彼女だったら大仰な悲鳴を上げていただろうが、背中への痛撃に比べたら、クッションの上から叩かれているも同然だった。
尻を四発叩かれて、その次は腰骨を直撃された。これも、かろうじて堪え切った。
ぶうん、ビチッ……
「ふらつくんじゃねえ。外れたじゃねえか。今のはノーカンだ」
もっと足を踏ん張っていろと言われて、当然だが脚は開き気味になる。
しゅんん、ビシイイッ！
「きゃあああああっ……！！」
真後ろから掬い上げるように打ち込まれたベルトは会淫をしたたかに叩き、先端は跳ね上がって淫裂にまで食い込んだのだった。

「悲鳴だわね」
「ヤスよ、ご馳走してやりな」
作業服の男が、バケツにセメントを掬ってドラム缶にかざす。
「待って、赦して！　もう、絶対に声を出しません！」
ばしゃしゃしゃ……
「ずいぶんしゃべったわね」
「可哀想だから、もう一杯だけにしてやれ」
「……！」
抗議も弁解も破局を早めるだけ。
「やめてくれ、殺さないでください！」
父の悲鳴にも断腸の沈黙を強いられる和江だった。
実のところ、危険は差し迫っていないのだが、土木工事の知識が無い和江には分からない。農業を営んでいれば、昭大はセメントの凝固時間くらい心得ているだろうが、恐怖が知識を忘れさせている。セメントは表面が固まるまでに丸一日は要する。腰のまわりのコンクリートを割ると淫茎が傷付くまでに中が固まるまでには、さらに二日は掛かるだろう。
つまり、トラックもドラム缶もセメントも、和江を脅す道具立てだった。もちろん、和江が脅しに屈さなかったときは、ドラム缶にセメントを満たすくらいのことはやりかねないだろうが。そうなれば、凝固云々以前に昭大は溺れ死ぬ。
何事も無かったかのように、若頭は後ろ向きの和江に命令する。
「小手調べの次は大手調べといこう。こっちを向けや」

大手調べというふざけた言葉の意味は、和江にも明白だった。震える足を踏み締め直して、急所を鞭打たれるために、若頭と向き合った。
若頭はベルトを持った右手を水平に後ろへ引いて、上半身を叩く構えになってから。
「ところで、何発叩いたっけ？」
征子に尋ねた。
「知らないわよ。数えるのはあたしの役目じゃないでしょ」
「おいおい。審判役はおまえなんだから、しっかりしてくれよ」
若頭が芝居がかって頭を振ってから。
「しょうがねえや。一からやり直しだ。それでいいな？」
とは、和江への質問だが。和江は文句を言えない。言えばドラム缶にセメントだ。せめて、抗議の意味で頭を横に振ったのだが。
「文句があるなら、はっきり言えや。だんまりなら、承知と受け取るぜ」
八月のときは、猿轡をしておいて言葉での返事を求められた。不可能事を要求して、被虐者を絶望に追い込む。その手口を、和江はあらためて思い知らされた。
「よし、これから百発に決まりだな」
言うなり、若頭は不意打ちに和江の乳房にバンドの鞭を飛ばした。
ぶん、バチン！
肘から先のスイングになったから、鞭としての威力は小さい。それでも、乳房が弾けたような激痛だった。
「ひとつ……」

征子が数える中、今度はじゅうぶんに腕を引いて腰をひねって。
ぶううん、ズバッヂイン！
「かはッ……」
自分の意志で悲鳴を封じる苦しさを、和江は存分に味わった。猿轡が慈悲に思えてくる。
「ふたつ……」
ぶううん、ズバッヂイン！
「かはッ……」
「みっつ」
征子が五発まで数えたところで、若頭は狙いを腹へ下げた。
ぶうん、バッチイン！
乳房への痛撃に比べれば、中休みにも等しい鞭だった。風切音からして違う。手加減してくれたのか、ただ腕が疲れたのか――和江としては、前者だと思いたかった。
ぶうん、バッチイン！　バッチイン！　バッチイン！
「ななつ、やっつ、ここのつ、とお。」
右下がり左下がりと交互に立て続けに打たれて、和江の腹にぼやけた赤いＸ字が刻まれた。
手加減された鞭はだんだん下がっていき、太腿も線刻と腫れで埋められる。
征子が三十を数えると、ようやく若頭は腕を下ろした。
「ふう。ウォームアップだけで腕が痺れてきたぜ。俺も歳だな」
今日のところはやめておこう――などと言ってくれるのではないかと、和江は若頭の言

葉を待った。しかし。
「いよいよ、本チャンといくか。ホンチャンと言ってもジュンチャンよりはきついぜ」
麻雀なんか知らない和江には、若頭の駄洒落は分からない。しかし、意図は容易に察しがついた。まだ狙われていない部位が残っている……
「足を開きな」
今度は後ろからではなく、真正面から股間を、オマンコを叩かれる。後ろからの『お釣り』みたいな叩き方じゃなくて……
和江はドラム缶を見詰めながら、左足を三十センチほども動かした。
「もっと大きく開け」
右足も三十センチ。腕を吊っている鎖がぴんと張って、和江はつま先立ちになった。割れ目がぱっくり開いたのが、自分でも分かった。
若頭が、垂らしていた腕をそのまま後ろへ引いて。
しゅんん、ビシイイッ！
ベルトは蛇のように床すれすれを這って、和江の目の前で上へ跳ねた。
開いた淫裂にベルトが食い込み、内側までこすりながら上へ奔って、先端は鋭敏な肉芽まで打ち据えた。
「がぁっ……！」
堪えかねて噴いた息が、そのまま断末魔の咆哮になった。反射的に和江は片脚を跳ね上げて股間を庇った。身体が宙に浮いて、全体重が手首と肩に掛かった。全身が振り子になって、大きく揺れる。

「さんじゅういち……今の声は微妙だわね」
「ふうむ。セメントは勘弁してやる代わりにノーカンだな」
安堵と絶望が同時に和江を襲った。それでも、両足を床に着けて開脚する。
再び、若頭がベルトを真後ろへ引く。
しゅんん、ビシイイッ！
「がっ……！」
「さんじゅういち」
股間から脳天へ突き抜ける激痛よりも、征子が駄目を出さなかった安堵が大きかった。
しゅんん、ビシイイッ！
「くっ……！」
痛みに馴れたのか、痛覚が麻痺しかけているのか、吐く息も控えめになってきた。膝が震えたが、つま先は床に着いたままだった。
そうして、三十五発まで進んだとき。
「ねえ、真っ赤に腫れてきたよ。ちょいと可哀想だね」
同じ女性として庇ってくれるのかと、和江は感謝したのだが。
「そう言や、そうだな。おまえが手当てしてやれ」
心得ているとばかりに、征子が大振りなハンドバッグから細長い缶を取り出した。
「これは、筋肉痛に良く効くからね」
和江も知っている。電気製品の組立は何かと肩が凝る。若いくせに湿布絆のお世話になっている女工も少なくない。そんな彼女たちの間で流行っているのが、湿布の成分をスプ

レーにした新商品だ。
征子がスプレーを手に、和江の前にかがんだ。
「脚を開きなさいよ」
手当てをしてもらえるという安心で、抵抗なく脚を開いた。
シュウウッと噴き掛けられて清涼感があったのは一瞬。無数の針を突き刺されるような激痛に襲われた。
「痛ッ……」
かろうじて悲鳴を呑み込んだ。
鞭打たれるよりも厳しかった。鞭なら激痛の一瞬の爆発の後は、曲がりなりにも疼痛は薄れていく。しかしこれは……突き刺さった針が皮膚を内側からほじくり返すような痛みが、徐々に強くなっていく。しかも、冷たい痛みが熱く変じて、焼鏝を押し当てられているのかと錯覚するほどだった。どれだけ身をよじっても、この焼鏝からは逃れられない。
「……！！」
それでも、無意識に腰をくねらせて悶えてしまう。
「こりゃ、いいや。ちょいとした腰振ダンスだ。カセットでも持って来るんだったな」
若頭がラッキーストライクをふかしながら、悦に入る。
激痛よりも、若頭の言葉に――和江は涙をこぼした。ごつい革ベルトの鞭に毅然と耐えていた少女が、初めて見せた涙だった。
若頭はたいして感銘を受けたふうもなく、悪ふざけに興じる。
「いっそ、おまえも珠代も雪も並べて、ラインダンスてのも面白いかな」

若頭が挙げた二人は、三号と四号、あるいは前妻と現妻――秘写真のモデルでもある。すでに紹介しているが、征子は一号。彼女はモデル第一号でもあるが、他組への献上品にされた二号の里美と同様、春を売ったりトルコ風呂で働いた経歴は無い。

「やなこった。あたしのほうが十近くも老けてんだからね。この子なんざ、倍半分だよ。それに、最近は若い娘をあんた流儀で可愛がってみたかったりしてるんだ。雪さんは、あんたを立てて遠慮してたけどね」

恰好の玩具を手に入れてくれて感謝してるよ――とも、付け加えた。

和江には、二人の掛合漫才を聞いている裕りなど無かったが。この場限りで赦してもらえるのではないと知れば、絶望のどん底を突き抜けた先は無間地獄と思い知ったことだろう。

「ふむ……シロシロ・エスエムか。それも面白いな」

「あたしの般若も、ちゃんと映しとくれよ。あんたみたいに隠したりはしないからね」

若頭が苦笑して。いい加減に和江を片付けるぞ――と、若頭がベルトを握り直した。

「三十五発だったな。ようやく三分の一か」

数字を聞かされて、和江は絶望を深める。これまでの二倍も叩かれたら……死ぬとまでは思わないけれど。肌に治らない傷が刻まれるのではないだろうか。

「嬢ちゃんよ。物は相談だが――俺からの仕置は、これで勘弁してやってもいいんだぜ？」

「……」

和江は若頭の目だけを見ている。もう、甘言に騙されたりはしない。股間への鞭を覚悟して、健気に両脚を開いて動かない。

若頭が肌に触れるほど近寄って、ベルトを持っていないほうの手で股間をぽんぽんと叩いた。ついでといった感じで、中指を立てて深く穿った。

「……」

和江は唇を噛んだが、鰐革のベルトを打ち込まれる激痛に比べれば、わずかな隙間をこじ開けられる痛みなど取るに足りない。

「ここで詫びを入れるならな」

とんでもない――と、反射的に思って。ふと迷った。全身傷だらけにされたって、お嫁に行けないことに変わりはない。どころか、寮の風呂にだって入れなくなる。それぐらいなら……

しかし、若頭は迷うことさえ許さない。

「ヤスよ」

若者も心得ていて、バケツにセメントを掬ってドラム缶の上にかざす。

「厭なら、ちゃんと言いな。黙ってちゃ承知と受け取るぜ？」

まただわ……和江は捨鉢な気分で沈黙を続ける。父の命を救けるために、売春をさせられることまで覚悟していた。いや、これはケジメのための仕置であって、金銭の償いは別にさせられる。だったら、この男に処女を奪われたって、早いか遅いかの違いしかない。

「よし、承知だな。聞き分けの良い子だぜ」

挿れたままにしていた指をぐりっと抉って、また和江に唇を噛ませた。

和江の腕を吊っていた鎖が外され、手首の縄もほどかれた。

和江はお義理に両手で胸と股間を隠したが、今さらという気分だった。鞭の痛みも疼く

が、股間に噴き付けられたスプレーの熱い痛みが耐え難い。
「もう声を出していいぜ。泣こうが喚こうが――いや、良い声で鳴いてくれるなら、ボーナスを弾んでやるぜ」
「父を救けてください。ここから逃がしてください」
父を気遣ってではない。父は世界中で四番目に、自分が凌辱されているところを見られたくない相手だった。もちろん、一番目は母親で、二番目と三番目は二人の弟だ。
「そうはいかねえな。おまえがきちんとケジメを付けて、それからの話だ」
和江は食い下がらなかった。ヤクザを怒らせるのは怖いし――父のせいで、こんな酷い目に遭っているんだと見せつけたい気持ちも、まったく無いと言えば嘘になる。
和江は立ち尽くしうなだれて、若頭が動くのを待った。
しかし彼は壁際に下がって、そこに積まれている木箱に腰掛け、またラッキーストライクを咥えた。
征子が、その横で服を脱ぎ始めた。八月にも見た豊満な裸身が、股間の般若面と共に現われる。豊満といっても、肥ってはいない。たわわとかグラマーと形容すべきだろう。
全裸になった征子が、ハンドバッグから奇妙な物を取り出した。いや、ごくありふれた民芸品なのだが、この場にそぐわない印象だから、奇妙なのだった。大振りなこけし人形が二体と、竹を輪切にしたらしい小さな起き上り小法師がひとつ。
征子はこけしの底を向かい合わせて、起き上がり小法師の胴に嵌め込んだ。ぴたりと合う。こけしを両側から反対方向へ捻じると、引っ張っても抜けなくなった。
「春の温泉旅行か」

「風紀紊乱の街だったわね。御当地名物『嫁姑和合こけし』ってんだから」
形状と名称で察する男は多いだろうが、もちろん和江には見当もつかない。征子が片足を木箱に乗せて、こけしの頭部を股間に挿入するのを見て、ただ驚く。
「おいで」
股間にこけし（というよりも、うなだれた巨根）を生やした征子が、和江の手を引いて壁際へ連れて行く。まさか八月から置きっ放しでもないだろうが、ブルーシートが敷かれている。
「待ってください。若頭さんが私を……あの……抱いてくれるんじゃ……」
面と向かって「犯す」という言い方をためらったばかりに、抱いて欲しいような物言いになってしまった。
「俺からの仕置はおしまいだって言ったぜ。征子は俺の名代みてえなもんだ。黙って嬲られてろ」
戸惑っている和江を、征子はブルーシートの上に押し倒し、膝を立てさせて覆いかぶさった――が、すぐに諦めて。上体を起こすと、和江の太腿を両肩に担いだ。自分は腰を突き出してみるのだが、こけしの頭を淫裂に埋めるのが、やっと。
ようやく和江は、征子がこけしをオマンコ（写真を売るようになってから、この言葉でしか考えられなくなっている）に挿入しようとしているのだと悟った。
「出来の悪いこけしだね。勝ちゃん、この子の片脚をそこのウインチェスターで吊り上げとくれよ」
「それをいうならウインチだぜ、アニー」

この掛合は和江にも分かった。数年前の連続テレビ西部劇『アニーよ銃をとれ』のヒロインがライフル銃を得意としていた。けれど、大きなレバーをガチャガチャさせるウインチェスターを使っていたのは『ライフルマン』ではなかったかしら――だいじょうぶ、私は冷静だわ。こんな辱めに屈したりはしない。

若頭が天井クレーンを操作して、和江を逆さ吊りにする。

肩と頭は床に着いているが、吊られていないほうの脚は、自然とV字に開いてしまう。和江には、閉じようという気力は無い。

征子が、和江を横向きに跨いだ。両足を掴んで、傾いているVを真っ直ぐに立てた。Vと逆Vとが交差して、逆Vから垂れたこけしの頭はVの交点に触れている。

「おやまあ、濡れてるじゃないのさ。まあ、マン汁か傷口のリンパ液か分かったもんじゃないけど」

濡らしてあげなくて良さそうだね。どのみち、勝ちゃんは女の子が泣き喚くのが好きなんだから――と、和江を不安に落としておいて。こけしの頭を淫裂に埋め込んで、さらに腰を沈めていく。

未通の間隙を大きな球体で押し拡げられる痛みを、和江は歯を食い縛って耐えた。良い声で泣けだの、泣き喚くのが好みだのと言われれば、意地でもそうはしないと反発する。

鞭とは違って、じわじわと痛みが強くなっていく。肛門に押し入られたときと似ている――のも道理だろう。未開の穴に棒を突っ込むことに変わりはないのだから。

しかし、痛みの感覚は異なっていた。重たい圧迫感は生じず、口の両隅に指を引っ掛けてイーッと引き伸ばすような鋭い痛みが強くなっていって。

「痛いいいっ……！」
びききっと、肉を引き裂かれる痛みに和江は悲鳴を上げた。しかしそれは、惨めな感慨の叫びとでもいう性質のものだった。淫裂に鞭を叩き込まれる激痛に比べたら、痛みと呼ぶのさえためらわれる。まったく不本意で、男に強姦されるよりも惨めな屈辱きわまりない破瓜。それでも、女にとって一生一度の痛みだった。
征子が腰を上下させる。ささやかな痛みがうねくる。
「さすがに締まりがいいわね。ほとんど、あたしの中で動いてる」
征子が、蕩けそうな声音で言う。
和江は首を折り曲げられているので、目を開ければ結合部を直視してしまう。真っ赤に腫れて赤黒い鞭痕に埋め尽くされた下腹部。そして、鞭と破瓜による出血で肌にへばりついている薄い淫毛。その向こうで、起き上がり小法師は小躍りしているだけで、征子が何倍も大きく上下に動いている。
「でも、こんなんじゃ物足りないよ」
征子が腰をくねらせ、円を描いたり前後に揺すったり。和江は、ただ痛みに耐えるだけだった。
延々と、それが二十分ほども続いて。
「いい加減にしろ。まだ肝心の話が済んでいねえんだ」
征子が、しぶしぶと腰を伸ばして――こけしは和江の中に残ったままだった。
鎖が緩められて、和江の身体がブルーシートの上に投げ出される。
「ケジメの仕置は、これで赦してやる」

「ありがとうございます……これで、父は……」
救けてもらえるんですねと言いかけた和江を、若頭が無情に遮る。
「山崎。おまは、猥褻物頒布の罪を一身にひっかぶって、警察に自首しろ。写真の撮影も販売も、全部おまえひとりがしたことだ」
突然のことに、昭大はもちろん和江もぽかんとしている。
「和江の写真がな、ちとヤバ過ぎた。演出じゃなくて実際の暴行じゃないかとか、見た年齢の問題とかな」
すべて事実だ。
「てめえが全部仕組んだってことにすりゃ、生田組にはお咎めなしだ」
「父は、どうなるんですか？」
「刑務所行きだな。年齢だの暴行だのは証拠が無えから、立証出来るのは猥褻物頒布だけだ。主犯だから懲役一年半で何十万円かの罰金が相場だ」
「そんな……」
「罪三等を減じて地獄行きは勘弁してやったんだ。ムショ行きくらいは諦めな」
一年半……もう三年も待たされたのだから、その半分なら。そう思ったのは和江だけでなく昭大も同じだったかもしれない。そこへ、若頭が追い討ちをかける。
「罰金が払えなければ強制執行てやつだ。田地田畑お召し上げか。お上はそれで許してくれるだろうが、世間様はそうもいかない」
「……？」
「たしか、男の子が二人いたよな。どっちかは就職するんだろうが……前科者の父親がい

る奴を採ってくれる会社があるかな」
「私たちに死ねって言うんですか？！」
和江は叫んだ。悲鳴だった。
「違えよ。俺と結婚しろっってんだよ」
「え……？」
「さっき言った量刑は、国選弁護人が型通りにやらかしたときの話だ。腕っこきの弁護士が付けば、執行猶予に持ち込める。そうすりゃ、弟が卒業するまでに親父は天下晴れて潔白の身。農協からの融資だって通るぜ」
話が飛躍し過ぎて、和江はついていけない。
「赤の他人のことなど知ったこっちゃねえが、仮にも岳父となりゃあ大切な身内だ。生田組の顧問弁護士――じゃあ、具合が悪いか。とにかく、腕っこきの弁護士を金の草鞋で誂えてやろうじゃねえか」
「どうして……？」
そこまで自分に執着するのか――は、なんとなく分かった。若頭も和江の態度から、それを読み取ったようだ。
「ヤクザだからといって、何でもかんでも横紙を破ったりはしねえのよ。通せる筋があるなら、通すぜ。おまえなら六マンコの筋のポンカス九マンコだ」
まさか国士無双は無えしな――と、和江には意味不明なことを呟いてから。
「おまえが法律上は二十歳以上の成人と見做されるなら、トルコ風呂は正々堂々と勤められる。立チンボだろうとヌードモデルだろうと、警察の目の開き方も違ってくる。お目こ

ぼしってやつだ。オメコ干しか、助平な言葉だな――おい」
「馬鹿言ってんじゃないよ」
外野席まで球が飛んで来て、征子が投げ返す。
「さっさと話しを決めちまいな。でも、そうすると雪さんを組員にゃ何て呼ばせるのさ。大姐御、姐御とくれば、姉貴かしら。それとも最初から大姉貴にしとくかい」
「おまえこそ、馬鹿言ってるんじゃねえぞ」
若頭が苦笑して、和江に問い掛ける。
「それでいいな？」
和江は、さして迷わなかった。どうせ、お嫁にいけない穢れた身体にされてしまった。自分が犠牲になって父も弟も救えるのなら、それでいい。それに……私を穢れた身体にした張本人に責任を取ってもらうのが筋かもしれない。
「黙ってるってこたあ、承知だな」
また、その遣り口なの――と、和江は反発した。ので、どうせなら自分から飛び下りてやれと、運命を決定づける言葉を口にしていた。
「私を若頭さんのお嫁さんにしてください」
「若頭は無えぜ。勝造様とか旦那様とか……」
「呼び捨てでじゅうぶんさ。だけど『勝ちゃん』だけは、あたしの専売特許だからね」
「じゃかあしい。このバケベソが」
照れ隠しでもなかろうが、若頭がドラム缶に近寄って、ガツンと蹴って。
「お義父さん、娘さんとの結婚を許してくださいますね」

「……」
「お許しいただき、ありがとうございます――言っとくが、組で顔が利くようになったとか、勘違いするんじゃねえぞ」
きっちり威しておくことも忘れない若頭だった。
――昭大はドラム缶から出されて、倉庫の外でセメントも洗い流された。昭大は衣服を返してもらえたが、和江にはまだ用があるからと全裸のまま。
そして、木箱の上に三通の書類が並べられた。婚姻届と昭大の承諾書と、離婚届。和江が用済みになればすぐに離婚して、次の嫁――六号を迎える下準備だった。
昭大は弱々しい筆跡で、和江はボールペンが紙を突き破る勢いで、それぞれの書類に署名をしたのだった。

父は拘置所

執行猶予が付く（だろう）と言っても、取調中はもちろん、判決が出るまで拘置所に収監される。簡易宿泊所住まいでは釈放の目も無い。
言い含められている昭大は猥褻図画頒布の罪はひとりでかぶり、暴行容疑と未成年強姦は性根を据えて否定した。警察も検察も、藪をつつけば生田組が出るのは承知の上だから、深くは追及しなかった。
裁判では起訴事実は争わず、弁護士も情状酌量に論旨を絞ったので、審理は短時日で終

わった。とはいえ、自首して逮捕されてから判決が下るまでに四か月余を要した。
その間の和江について、あらましを述べておこう。
結婚届に署名した直後、ついに和江は、開通されたとはいえ男を知らぬ穴を若頭に貫かれた。捨鉢と自己犠牲と強迫とによる性交であっても、合意には違いないのだから、犯されたという表現は当たっていないだろう。
娘が男に抱かれる様を見せつけられて昭大は苦悩しただろうが、男の心理など追っても興を殺がれるだけなので端折る。
昭大の出番は、あとひとつだけ。和江と共に工場へ行って、即刻退職させることだけだった。結婚が決まったと言えば（まったくの事実だ）深く追求はされないし、父親が付き添っていれば実家へ問い合わせが行くこともない。まだまだ、家の都合でろくにお見合いもせず結婚に至る例も、地方には残っていた時代だった。
傷の治療に和江は一週間ほど、生田組御用達の病院に入院させられた。勝造（名義上は夫婦になったのだから、小説上の表記も改めよう）は二回だけ見舞に来て――なにしろ個室だったから、新婚の熱々夫婦なら、それも当然と言うような狼藉に及んだ。
驚いたことに、勝造は和江を極めて優しく扱った。婦人雑誌が男性に求めるような繊細で長時間の愛撫にも及んだ。
しかし和江は、くすぐったくて鬱陶しいと思うだけで、小高い丘の麓にも達さなかった。看護婦がいつ入って来るか分からない環境では当然――なのではなかった。勝造が手を抜いたというか、わざと急所を外したのだ。彼に弁解させれば、それでも入れる物は挿れたということになるが。

そして、退院した直後に彼女を宿泊を要しないホテルへ連れ込んで。持ち込んだ縄で縛って、苛酷な鰐革ベルトではなく大人の玩具屋で売っているバラ鞭で（それでもじゅうぶんに厳しく）全身を鞣してから、過敏になった肌を執拗に愛撫して和江の反応を引き出し、自慢の真珠入り疣魔羅で、それまでに和江が体験したことのない高みにまで押し上げたのだった。

「俺と征子が見込んだ通りだぜ。おまえは虐められて悦ぶマゾなんだよ」

そう言われれば――和江にも、思い当たる節はいろいろとあった。今の決定的な事実だけではない。撮影されているときに縛られたり、仕置に掛けられて鞭打たれたりしたときにも、肉体としては苦しいだけだったが、何か妖しい感情が生じていた。だからこそ、征子にからかわれたように、辱められて濡らしたりもしたのだ。

そうやって和江は急速にマゾへと調教されていった。いや、マゾの素質を開花させられた。

開花を早めた勝造の仕打ちのひとつに、剃毛があった。

「俺の女はすべからくパイパンにするんだよ」

浮気防止に女房の毛を剃るやつもいるが、俺のはただの趣味だ――と、うそぶくのだから、呆れてしまうが。どうにでもしてくださいと諦めている和江は「すべからく」の微妙な誤用に気づくこともなく淡々と受け容れて、すこしく勝造を失望させたらしかった。

むしろ、脇毛を剃る習慣が定着していない、この時代。ノースリーブなら確実に見えてしまう部位を無毛にされるほうが羞ずかしいくらいだったが。

「パンティを脱いでおきながらブラジャーを着けたままって法はねえだろ」

奇妙な論理に納得――しようとしまいと、勝造に抵抗など出来ない。
同じ論法は腕にも脚にも適用されて――以後、首から下は剥き卵で、和江は春秋を重ねることとなった。
勝造は和江をマゾ奴隷へと堕としていく一方で、女の幸せの『形』を叶えてやることも忘れなかった。
ヤクザ流儀の派手な結婚式こそしなかったし、参列者も二号を除く勝造の歴代女房だけでどちらの親も呼ばなかったが、文金高島田に羽織袴。神前で真似事だけはして記念撮影。写真館に場所を変えて、ウェディングドレスにタキシード。和江が勝造に心を開いて後は、この二葉の写真が生涯の宝物になる。
和江は新しいアパートの一室をあてがわれて、そこで暮らし始めた。住民票も移したし、会社には父親への連絡先として届けておいた。といっても、勝造と同居ではない。
勝造は意外と義理堅く、それとも精力絶倫なだけか――他組への献上品とした二号の里美を除いて、和江を含む四人の女を多い少ないはあっても、それぞれ月に数回は抱いている。いわゆるセックスだけのときもあればエスエムもあった。しかも、その合間には、風呂も街角も厭という女に引導を渡したり、亭主の借金の利息を待ってやったり、単純に味見をしたりと――まさしく竿の乾く暇が無い日々だった。
それに比べれば、和江の穴は埋まらない日のほうが圧倒的に多い。といっても、甘やかされていたわけではない。
週に四日はトルコ風呂に出勤させられていた。前年から取締が厳しくなって本番が自粛され、ペロペロが限界。過激なサービスでもゴックンまでだった。

ちなみに、これを嬢は歓迎しない。顎と舌が疲れる。形だけ亀頭を咥えて手コキだけで済ます猛者も居るが、和江は律儀に教え込まれた性技を駆使する。手抜きが勝造の耳に入れば半殺しに――されてみたいと思わないこともないのだが、そういう問題ではなく、彼女の性分が許さない。

だから和江は、短期間のうちにトルコ嬢に特有のテクニックを習得していった。といっても、まだ泡踊り（マット洗い）もスケベ椅子も無かったから、驚くほどのこともなかろう。

和江には、父の不始末で生田組がこうむった損害の賠償よりも重要な責務があった。生田組若頭の女房として、他組織の幹部や政治家、ときとして官公庁の役人の接待である。といっても、和江が取っ替え引っ替えの五号であると相手も知っているし、勝造もそのように扱った。

ときには緊縛の先生を呼ぶこともあり、ときには亭主みずからが、女学生の年齢である新妻を縛り甚振り、あるいは接待相手に甚振らせる。

勝造が出しゃばらずに、征子が『男優』を務めることもあったし、一度などは歴代女房の四人が一同に会して、文字通りの卍巴を披露したことさえあった。パイパン（そのうちの一人は刺青）四人の揃い踏みは、それだけでも壮観なものだった。

そして――宴会が終われば和江を（ひとりだけとは限らない）接待相手の下（もと）に残して引き上げるのが常だった。征子は絶対に『二次会』に参加しないし、まとめて四人を接待した卍巴のときも、残されたのは和江と雪だけだった。そして二組の『嬲』ではなく『娚』と『男嬲』の形になった。男三人の肉布団にもみくちゃにされたのは、もちろん和江のほ

うだった。
たとえ『娚』でも、見知らぬ（おおむねは）くそ爺に嬲られるのは厭だったし、憎い男とはいえ夫を裏切っているような後ろめたさも感じてしまう。
それでもいつしか和江は、接待の夜を心待ちにするようになっていた。接待が終わった翌日はトルコ風呂も休んでアパートに待機していると必ず、連れ込みホテルへ連行されるか、例の倉庫へ呼び付けられるからだった。そして、根掘り葉掘り問い詰められる。
何をされたのかは分かりきっているが、どういうふうにされたのか。おまえは感じていたのか。まさか逝ったりはしていないだろうな。
尋問には必ず鞭と縄が伴ったし、夫を裏切るような反応をしてしまったと告白したり（猿轡で言葉を封じられて）否定できなかったりしたら、針や蝋燭や浣腸やワニロクリップと電撃のセットや征子が待っていた。ただし、何日も入院するようなことまではされない。
――そうして、冬になり春が訪れた。

父との訣別

和江は遠くから物陰に隠れて、拘置所の門を見詰めていた。今日、父に判決が言い渡された。無事に執行猶予が付いた。これから三年間、過ちを起こさなければ清廉潔白の身となる。進学ではさすがに戸籍謄本までは求められないから、弟の未来に影は差さない。
拘置所に預けている私物の引き渡しのために父が連れ戻されて、かれこれ一時間になる。

和江が遠目に見た限りでも、父はすっかり参っているようだった。
それに比して――この四か月の間に、彼女の雰囲気は大きく変わっている。垢抜けたのは、勝造が言うところのバケベソ化粧をやめて、一号の征子から教わった基本に、歳の近い四号の雪の遣り方を採り入れた結果だった。
そして化粧の下から匂い立つ早熟な色香は、彼女が女としてじゅうぶんに開花したことを雄弁に語っている。
しかし、大輪の花ではない。手折るどころか踏みにじってやりたいと男に思わせる風情は、隠れていた素質を勝造の手によって（征子の協力も相俟って）自覚させられ育てられた結果だった。
拘置所の正門の前には、一組の男女が立っていた。勝造が付けてやった弁護士と、証人台に立って切々と情を訴え夫の厚生を誓った、昭大の女房。
ちなみに、和江は裁判を傍聴もしなかった。裁判官の手元には『証拠写真』がある。たとえ化粧と髪形が違っていても、同一人物と見破られないとも限らない。見ず知らずの少女をモデルとして雇ったのでも罪は重いが、実の娘を裸にして縛ったり性交紛いのことをさせたとなると、情状に酌量の余地など無くなる。もしも昭大が窮して真実をぶち撒けてしまえば、生田組が大打撃を受ける。
そして、母親は母親で――父親の不面目というも愚かな様を子供たちには教えたくない。だから、この正月に和江が心痛（と、全身の痣）を隠しながら帰省したとき、母親もまた苦悩を打ち明けていない。当然に、和江は何も知らないと信じている。
和江が隠れているのは、そういう理由からだった。
父もまた、娘の消息について母に語ることはないだろう。

この父母娘の喜劇というには悲しい三竦みは、和江がその気になれば、下の弟が卒業を控えて求人元の企業に戸籍謄本を提出するまでは続けていられる。戸籍謄本を見れば、和江が結婚したのが明らかになるし、粉飾するにしても母が納得する説明が必要になる。しかし和江は、母を偽るのも父を庇うのも、もう厭だった。厭というより煩わしかった。

新憲法で男女平等が謳われてから十九年を経過したとはいえ、男尊女卑の根っ子は深く張り巡らされたまま。ウーマンリブは数年先、ジェンダーギャップという概念すら無かった、この時代。元始は太陽でも今は月である女性にとって、彼女の肉体を支配する男が、世界の全てといっても過言ではなかったのだ。

だから和江は、春の大型連休も夏の盆休みも――今後ずっと、帰省するつもりはない。

「出て来ねえな。何をもたついてやがるんだ」

和江の肩を抱いていた勝造が手を滑らせて、スカートをめくった。亭主の好きなミニスカートだから、簡単に尻が剥き出しになる。しかもノーパンだった。

「きゃっ……」

多分に甘ったるい悲鳴を上げる和江。外気に曝された尻を隠そうとはしない。人に見られたら――というよりも、見てほしい。それで自分が掻く恥は小さい。こんな短いスカートを穿いていることも含めて、顰蹙にしろ羨望にしろ、それは和江を連れ回している勝造に集まるのだから。

「おお、落とさなかったな」

勝造がさらに手を進めて、和江の股間から顔を覗かせている球体を押し上げた。

「ああんんん……」

和江が、まんざら演技でもない鼻声で呻く。彼女は小さな鉄亜鈴を咥え込んでいるのだ

った。勝造の命令ではあるが、羞恥プレイでもなければ快感責めでもない。膣を鍛えるためだった。

この五か月、勝造の真珠入りや征子のこけし、果ては擂粉木から極太玩具で可愛がられてきたとはいえ、せいぜい月に五回。ようやくこなれてきた段階だから、今以上に締まりをきつくしても無意味である。剛柔を使い分けられるようにも調教されているところだから、フニャチンでは堅固な門を突破できなくて接待に失敗するといった懸念こそ無いが。

では、何のための特訓かというと、花電車芸を和江に仕込むのが、勝造の目論見だった。四十近い『師匠』の元へすでに何度か通わせている。

ひとつには宴会芸のレパートリーを増やすためだったが、離婚後の和江のためだと、勝造は言う。花電車を出来る妓は少なくなった。居ても姥桜ばかり。和江がデビューすれば、ストリップ小屋からもお座敷からも引く手あまただろう。

手に職の無い和江には、堅気の仕事といえば、低賃金の雑役婦くらいしか働き口が無い。

三号の珠代は小体（こてい）なバーを買い与えられて、みかじめ料も払わず営業させてもらっているし、和江と入れ替わりに離婚させられた雪にしても、小料理屋を慰謝料代りにもらっていた。

「おまえには楽をさせてやらねえ」

和江は五十まで裸で稼げと、勝造に申し渡されていた。それまでに老後の生活費を貯められなければ野垂れ死ねとも。

「おまえには、そういうのが似合いなんだよ。だから、そういうことしか出来ない細工も施してやったんだ」

勝造のいう細工とは、股間の刺青である。歴代女房のうち一号の征子にしか施していな

い刺青と同じ――ではない。図柄だけでなく、和江のはアメリカ直輸入の機械彫りで色彩も鮮やか。刺青ではなくタトゥというべきだろう。

図柄も派手だ。大淫唇を胴体に見立てて、内腿いっぱいに翅を広げた極彩色の蝶々。牝チンポ（と、勝造に教え込まれた）が小さな頭になって、そこから触角も生えている。そして下腹部には、蝶々が蜜を吸っている赤とピンクと鮮やかな青の薔薇。どれだけ淫毛を伸ばしても隠せない。

絶対に再婚は不可能だし、愛人として飼ってくれるのもヤクザくらいだろう。

こんなタトゥは、もちろん勝造に強いられたものだ――形の上では、そうなっている。

横文字で書かれた看板を掲げた小さなビルの一室へ連れ込まれ、見知らぬ若い男の前で裸にされてベッドに大の字磔にされて。例によって猿轡を噛まされてから尋ねられたのだ。

「これから、おまえのマンコに征子よりも大きくて可愛らしい彫物を入れてやる。厭なら、そう言え」

驚愕と恐怖と羞恥とが一斉に燃え上がったが、嫌悪とか拒否の感情は大きくなかった。

幼な馴染の一号にしか入れさせていない刺青。そして「征子よりも」という言葉。それを和江は愛情とまでは勘違いしなかったが、愛着ないしは執着と受け取った。女にとっては金鵄勲章にも匹敵するのではないだろうか。

「ちゃんと厭って言わなけりゃ、承諾って思うぜ」

首を横に振ったって無駄だから、そうしないだけよ――和江は自分に言い訳しながら、勝造の目を睨みつけたつもりだった。視界がぼやけて、目を瞬くと涙が頬を伝った。たとえ過去の一切に口をつぐんでも、たとえ事務所に放火して写真を焼き払っても、絶対に堅気の社会に受け入れてもらえない身体にされる、その絶望の涙だと――和江は、胸の奥に

生じた甘酸っぱいような塩辛いような感情を無視して、そう考えたのだった。
施術が始まると、猿轡を外された。それは悲鳴を愉しむためだと和江も分かっていたから、脂汗を流しながら歯を食い縛って意地を張った。
「まったく我慢強くなったもんだな。おい、筋彫は後回しにして、胴体の色付けを先に頼まあ」
胴体への着色。それは色素沈着がまだほとんど無い大淫唇への針を意味していた。
ジャギジャギジャギ……機械彫り特有の低い音を立てながら、インクを含んだ数十本の針が立て続けに鋭敏な皮膚に突き刺さって、和江はサディストを歓ばせる悲鳴を上げたのだった。
和江の大淫唇は、自然では有り得ない、艶を帯びた漆黒に染められた。
一日を置いた二回目の施術では、牝チンポに朱を入れられて、悲鳴では済まずに泣き喚いた。
そして三回目と四回目には勝造は同行せず、組の若い衆に送り迎えをさせて、ビルの中までは立ち入らせなかった。縛られずに自分の意思で脚を広げるのは羞ずかしくて、勝造に縛られて眺められているときより激しく濡らしてしまったが、若い彫師というか施術者は知らんぷりをしたので、さらに羞ずかしくなるという悪循環に陥ったりもした。
手彫りに比べて機械彫りはずっと痛いと言われているが、内腿への彩色では、和江は一度も声を出さなかった。勝造が聞いていなければ意味が無い。
四度の施術で蝶々と薔薇が完成して、和江は名実ともに勝造の女房となった。
「お……お出ましだぜ」
勝造は、まくり上げていたスカートの裾を直してやって、和江の肩を抱いた。

拘置所の門が開いて、係官に付き添われた父が姿を現わした。一瞬、父が立ち止まって、棒立ちの母と向かい合う。弁護士に促されて母が駆け寄り、父に抱きついた。戦前から戦中にかけての教育を受けた女性にしては大胆な行為だった。

父は母を抱き返しながら、視線を周囲に彷徨わす。和江の姿を探しているのかもしれない――ので、和江は物陰に引っ込んだ。

「もう、いいだろう。居れば居るだけ、未練が募るぜ」

和江は夫に身体を密着させた。肩を抱いていた手が下へ滑って、今度はスカートの上から尻を撫でた。

「そう言や、こうやっておまえを引き回したことは、まだ無かったっけ」

勝造の右手が春物カーディガンの前を割って、薄いブラウスの上から乳首を摘まんだ。ふだんはブラジャーを着けるようになった和子だが、勝造の流儀に従って、ノーパンのときはノーブラだった。

勝造の嗜虐的な扱いに、たちまち牝チンポと乳首が硬く尖る。

和江は両親に背を向けて、乳首を引っ張られながら、それでも夫にしがみついて。踏み外した道のさらに遠くへと向かって歩むのだった。

秘写真：完

花売娘

筆者は、タイトルに凝り過ぎる悪癖がある。

前半の物語に三文字の表題を付けたからには後半も三文字に納めたい。だから『花売娘』にした――のではない（こともないのだが）。

前半の物語では商品が秘写真であった。そして後半では、商品は『花』ではなく『花売娘』なのである。つまりは、そういうことである。

マッチなら売れ残りを持ち越せるが、生花となると一夜限りであろう。少女ひとり分にしろ生活費が稼げたか、かなり怪しい。春を売る隠れ蓑として花を売るというのが実情だったと思うが、ネットの怪しげな記事以上の根拠を知らないのは筆者の勉強不足である。とはいえ、筆者の作品群は妄想の産物なのであるのだから、そんなことはどうでもいいのだ（©バカボンのパパ）。

憲兵が電マを持ち出したりポラロイドカメラで証拠写真を撮ったり、戦国時代に等身大の姿見や座布団が登場したりしなければ、軍議で「兵站」だの「遅延」だの言わせなければ、昭和時代に「企業を立ち上げる」などという表現を排除すれば、それで筆者は時代考証成れりとする。

『偽りの殉難～香世裸責め』で、全裸緊縛で引き回されるヒロインが馬上でWe shall overcomeを歌っていたのは……てへぺろ。

そんなことよりも。当時は「処女は面倒くさい」とか「ガキに女の色気は無いし道具も

未熟」として、ロリータに価値を見出さない男が多かったというほうが、遥かに重大問題である。もちろん、上流社会の未熟な少女を好んだ太閤秀吉などの例外も枚挙に暇は無いのであるし、そもそも日本の文学は源氏物語というロリコン小説を嚆矢とするのだが。

なお、「花売娘」と「マッチ売の少女」のどちらを取り上げるかで、最後まで悩んでいたことを告白しておく。文字数で決めたのではない。「燐寸娘」とか三文字に出来なくもないのだから。しかし、暗闇の中でマッチを点してパンティの中身を見せるという絵柄はコントラストが難しいので断念した。

※続きは製品版でお愉しみください。